俳句日本

十月號

第一卷第五號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和十九年十月二十日（毎月一回一日發行）

昭和十九年十月二十五日印刷納本

俳句日本　第一卷第五號

みいくさ集……（一）
俳句日本作品（其一）……（三）
井泉水選……（三）
卍禪子選……（一〇）
一碧樓選……（一四）
俳句日本作品（其二）……（一九）
井泉水選……（一九）
卍禪子選……（二七）
一碧樓選……（二九）
新俳句論研考（二）……西垣卍禪子（二七）
句評……（二九）
各家近什……（四一）
句輯……（四六）
田庭追悼……

表紙　望月春江畫伯
題字　喜谷六花氏

有隣亭蔵書

みいくさ集

移動軍馬のうごき夕立雲のうごき　蓬萊鶯郎
皇に仕へまつる青柿實る木に對ふ　長屋青橙
銃聲梢畑から土の塀へ突込む　大竹北汀
正氣之歌あり諸の島ありこの日豆を挽く　西山刀耕
決戰海を征くに飛ぶとびうをひかり　富岡のぼる
五ケ條奉唱す草に石に露あり　守矢日出男
太平洋にみんなゐる氣持ラヂオきらない夏夜　高橋日東子
稔り穗のうごき今日を征く兵ら神兵　金子曙山
決戰よるこびあり地に芋の葉の茂り　田邊愛水
挺身學徒らと雲去りし夏山　村上呂半
人おごそかに軍裝萩しげる家に　林さあを
軍馬この馬の擧動地のなづな花咲き　中一恒三郎
主翼方向舵など運ぶ草が穗が青い　武居泊雨
翼を艦を軍神わだつみに宣らず聲する　川津一之
谷間土用の茂りみせ轟々と過ぎる一機　石下谷乃不女
風も空もすつかり秋の陣地の號令が澄み　奥村そのえ
そのみ言葉のかしこしこの日桐の葉に降る雨　古川直右
秋作りの一鍬一鍬と爆音汗びつしより　岩舘テル子
夕雲あかく穗田へお召の思ひきり胸をつき出し　渡邊舒生

汗がなに前線もへば麥扱きの勳力廻はれ廻はれ	伊藤藤比古
ヒマの芽が出揃つたよばんざあい	照井稗人
何氣なく渡さうとする新聞眼鏡は曇つてゐた	吉池良子
何か配置についてゐるその少ないひとりが出て征く暑し	
菜園の立體化を考へて六月の陽に立つ	原丈鳳
いどみこばこい悲報はもさあ耐へぬかう	神崎跨昆
我隣組は逞したのもし裸身できた壕	衣浦眞
星がとびし嗚呼玉砕の兵の顔々々の	小野暮仙
君よ、鳥海山は雲もない今日の秋空にして征くか	久野仙雨
小休止、妻を憶ふことは雨くる丘耕すをみな見ゆ	佐藤一仙子
敗ければ斯うなる勝つまでと教へ毎日炎天	畠山實治
戰を表現する講堂のそば木の秋	川廷謹造
海のかぎりは秋の戰場の近いこころ月の夜	近木黎々火
ラバウルへつづく空がくらいばん監視所の階段	中島せい作
ごとし十九の兵隊さんたちがゆく高い向日葵	木村綠平
稻穗平らに靄を引く月にいで征く	柳田洗矢
爆音雲雀はひばりで空	小林銀汀
馬が耳袋をかけ眞夏となりし木材輸送陣	池原魚眠洞
月夜の障子あかるく灯して翌は征くごまばたけ	大越吾亦紅
決戰けふも日は富士の肩に入る	伊東俊二
日本造船白い建物と並木いつ決戰の日	古林巴水樓
風が大樹におこりくるいくさごころにゐる	內島北琅
	秋山秋紅蟇

俳句日本作品

選句錄

○井泉水選

この子村にもなれてつゆどきの梅の木の梅　高松　大山多石

あめがふる日の竹にふるあめのやんではまたふる

牛小舍には牛がゐてまいあさ朝の日、多

多木があかるい月がみづうみ

青葉に午後の日が浪白く船の出てゆく　滿洲國　清水たかを

北極星はまつ北で遠雷するこん年豐作

殘暑きびしい黍畑から出て來る道の昏れ

實りて秋のまぐさ載る管かそこからけぶり

工場一にち機械の音の守衞さん詰所向日葵一にち

荷は驢馬がひいてゆく長い耳日が短うなる　東京　中村正明

合歡の花が、月から娘さん歩いてきた

葉に葉のしげり螢のほのぼのあるく月夜で

トマトは皿の中にあつてベッドと机のそこも夕燒

草いきれへ蜥蜴がにげこんでゆく鉋かけてゐる

星が一つづつ生れて來るかやつり草です　東京　針生惠代

今年の櫻のこれが鹽漬の歷史が青葉してゐる（吉野山）

すずしさに實つてゐる繪はがきなど釣鐘も見て（京都）

柿喰へば鐘がなるなりと子規の字そのままでいまかなな

夢殿松の葉案內の鍵もつについてゆく

聖太子を想ひ松に松かげの蟬なき　愛媛　武田桂

くさにあるかぜが吹いてゐる

警報がとけた星とラジオの遠い音樂と

蜘蛛の巢が濡れてゐる美しい雨のお伽噺讀んでゐる

山にある墓が海を見てゐる秋

池に雨がやむと山が晴れてゐる　東京　里井正子

風にちつたもののかぜにちつたままのすがた秋

土から白い月が出て豆の花暮れないでゐる

二階の灯がとどいてゐるしげみのその先も先もないてゐる

ひつそりと湧いた雲が萩の花子をねむらせる

うるしの樣なてふがゆきのやうな花が炎天ちつてゐる　德山　龜谷庭草

雲の多い日の富士も雲をきていものつる

朝は明け前の林と青田の中のしらかべ

明け放して月明りのラジオの灯ばかりの報道ばかり

山田青田の陽が夕づくとしようりようとんぼ

遠淺の引き潮の夏雨ふる島がつひさき　東京　日野素木

雨が夜のうち降つた兵隊さん洗面所の櫻の木

柿の葉の雨のどしやぶり

工場が出來て青田、蓮の咲いてくる　東京　松岡蒼兒

雨がこぶりながれいつぽんばし濡れてゐる

朝日さすところ蓮咲いてゐる全工員體操　仙臺　櫻田輝郎

星が涼しいときの木の橋

川音は朝のぐみの木にぐみの實いつぱい

だれにも會はなかつた木の星

きよう山晴れた　東京　高橋燕佛

このごろ女運轉手が、もうこの邊稽りまつすぐに走る　大阪　菅崎道雄

月がだんだん夜になつて桐の木ととり小屋

新聞があつて朝の間は涼しい息者として

朝から卓上ピヤノなんども白い雲の空想を持つ

星からちつとも風がなくて毎晩サアチライト

あらしのあとの金魚と木の葉と雨のこまかな　尼崎　佐藤龍

朝蟬すずかけの木、憲兵二人騎馬でゆく

晝ぞら月がうつすりとひともときやう

待つあるを恃む風鈴は風に鳴ります

もぐさもゆるにほひもとしよられた

笑ふだけの狂人であつて笑はぬとき日盛り　吹田　青鷹香

雨のない暑さ續きでながいながい列車が通つてゆく

櫻散るでもなく寄宿舍の窓みんなふとん干してある

夏も最中になつて草からでた道草にはいつてゐる

蟬の聲もなんとなく秋めいてゐる男山淀川　東京　松岡蒼兒

月が暈きて豆のつる工場から歌つて歸る

星空に星が動くと爆音である　唐黍に風が來る島と艦と旗が字をかく

昔戰爭のはなし老人磨いて黑い機銃もつ　東京　高橋燕佛

戰の談は淡々と話して白衣のをのをの多の日

飯窓からは綠の島白い雲など第三病室慰安會

青空音樂がひびいてゐる海軍病院日曜

島に月があるまはりの海が荒れてゐる　東京　印南健治

月夜晝のやうな參拜の人たちの震災記念堂あたり

夕日は觀音さまの高い銀杏つくつくぼうし

答辭が終るとひぐらしさらにひぐらし散會する

影が來て影が去ぬポストが寒い月夜　大連　重村順孝

殘雪に月夜の道寺町の寺へかへる

鍬がゆふやけである、に洗ふ

豆の葉に雨止んでゐる豆もうたべられます

風が行くカラカラ落葉が行く自動車でゆく　滿洲一　萩原和夫

風がもろこしの白い雲にある穗

このごろ弱き妻の、向日葵のたくましき花にゐる

水引草も秋になる日本は遠し

この秋は國から便りもない風吹くもろこしのひげ

山は月夜が装つてゐる水車小屋から流れて來る水
桔梗かるかやかやかや月夜の月のみちで
土がほんに秋そば畑朝日さしてくる
暮れて蔕麻の葉に二百二十日曇つてゐる

栃木縣鹽田正吾

芋の葉くびふり日かげになつとる
花と葉と空と雲と蓮池の水
鮮童牛つれて歸る粟の穗のふつさり暮れる
枝のまつかさ落ちてゐるまつかさ秋になる雨

京城篠崎早男

川が綿の花へ暮れてゐる
草ひけば竹が涼しい夕ぐれの客る
秋を掃くおとの靜かな
ブランコへ秋が來る頃の公園雨が青い木々

大阪阡陌多代

北の空北の星が位置する青桐が涼しく
をぢさん子等は戰地でをばさんと畑の芋がよう出來てゐる
畑のすみ待避壕にしてほうき草實になつてゐる
お月夜慰問の練習してゐる唱歌がきれいに流れて來る

千葉關根ふさ子

大旱だつた稻の揃はない丈の青々と生き生きと
暮れるころは釣れて來るはぜのびくの中のはぜ
ステッキは拾うた竹で波ば崩れて白い秋
この潮がサイパンの潮へこの礁が戰場となる日もからす

靜岡平岡國次郎

東京高橋耕吉

草、下駄をそろへた上に帽子をおいて其が終つてゐる
いくつになつても山ぶどうの、まだ青くて小鳥もこない
雲のながれてゆく日は白い頁の本と女郎花と
くらくなつて女郎花などをつてきた足を洗つてゐる

三重東草二郎

すずしさ風がふと句を持つてきてくれたやうな紙に書く
汽車が笛ふくと深夜、笛に添ふ風の荒模様らしく
病むで寢てゐるとひつそり箱に干した唐辛子

吹田多胡比左志

こほろぎに馬追も來て良い月の夜の爆音
草の猛さよ大きく出た月よ
裸で思ふことなし簡閲點呼濟んだ晩

宮城傷痍土屋曙子

さるすべりの花が窓を明けて君とゐる空
このところ夕顏咲きつづく療院一隅の風景にゐる
さるすべりの花曇り日が續いて雨となつてゐる

和歌山梶本芦城

あからさまな月にねるねたり起きたりのすだれをつる
よその鷄があそびにきてゐる大豆の花

三重加藤古棒莊

このかぼちやたつた一つなつたかぼちやの夕餉
よちよち紅緒できますあたたかい雨だれ

東京都々城二丁字

道は一すぢの女郎花雲吐く峠見えて來て
征くを送るにごんなにも後續部隊のある話の皿の枝豆

栃木　齋藤淡坦洞

病もうひとりつめ切るほどのかなかな
夕あかり石造倉の窓が暮れてゆく
嵐になりさうな燕飛び交ふて樫の芽

長野　高橋松二

夜風すでに秋決戦を歌つて通る
征くまへ蒔いた枝豆たべられて名月
石の門があつて守衛所の守衛さんいなづま

三重　鈴木裸蟬

だんだん月の寒く病人粥もほしくないと
雨やめばすぐ星の出る空の爆音
蟻が出あふと戻つてゆく暇な一にち

駐〇〇　石川舟洋

まことと夕焼雲にして口笛吹けば樂し
ぬれて夜の樹で四五本で立つてゐる
暮れるにはすこしまのある酒だるの口

長野　栗田白夢

風がねむの花をこぼしたりして日がくれる
お召しの馬に隣り近所が集つてくる秋になる雨
雨ふる監視哨見える山の湯の町暮れる

福岡　下田麥

浪は、軍艦がとほつた濱木綿によせてゐる
背山の黍畑穗になつて雀來てゐる
溫泉の寬水の寬してここら竹どころの竹籔

福岡　藤川白涼

ぬれた朝のお月さまは白くて屋根の十字架
向日葵、あつい日向の蟻がはたらいてゐる
しづかな流れで月が月夜となるみづすまし

三重　水野田々詩

稻穗のみち厄日靜かなモンペにて農婦として
夕日まつかな流れに馬を入れてゐる
驛へ道が青田青田さらさら風ふく

東京　瀧川安彥

どこかで荒れてるらしい風が蚊帳をふいてゐる
水たまりと栗のいがと風が止んでゐる夕べ
秋風が一つ一つ物干ばさみで止めてある

東京　印南一司

朝夕涼しうなつたことから昔のことからひるの浪音
煙もりもりあがる見えて雨がふるこの一帶へ通ふ人達
一針縫つておじぎしてゆくひるづき

東京　三井不二雄

左記へ移轉仕候南瓜小さく實のつてゐる
あかいあかい夕燒けみんなみんなかへります
ビル大らかに白い雲の通る

京都　内藤英夫

草を刈り草を刈り伏せ日のしづみゆく山のかたち
貨車のかげが滿月になつとる
朝暗きみやしろ詣で君は征く一兵として

長野　栗田千可志

たんすの引手も供出とおふれがくる秋がくる
遠くのいなづまはだかでおんぶしてくる
汗のシャツの道路工夫と道具箱

警報下の出勤はあふひが咲いたあさつゆ　横須賀　桐井水子

もつたり唐きび熟れて朝が早いこども達で　福島　鈴木單衣女

秋日瀧澤町の白壁つづきます（飯盛山）　岡山　岡田花野

黄色い田と白い水との一本道日はしづか

病む窓にして青い空花を咲かせて　東京　堀切春扇

秋くることを雨の音やんでゐる　東京　鳥居光子

そろそろ朝夕すずかけの風が來てゐる

ひまはりいちにち陽が照つてゐる

幼くひとり讀んでゐる見えてふる雨　千葉　福本逸子

坂を下り坂を上つた處にある工場の白い屋根へ毎朝

潮が引くと鷗も行つてしまつた水平線が秋　東京　兩角良哉

炎天ヒマは實つたこととしも戰うてゐる

木のとつぺんかぼちやの花夜明けてゐるのも　山口　小島胡市

南瓜のはな明日から出勤とする

信念は、必勝の柿の木の古さよ　福岡　沖武夫

秋、野山より召されし兵のこの汽車の歡呼の聲

しみじみ草の風ここに石になつてゐる父　昔のままの橋を渡りみやしろ樟の木　福井　小林秀淨

葉のゆるる秋の月として出づ

誰もゐないへちまのはなを訪うてもどる　山口　大中青塔子

再び征くことの氣易い君で梨喰ひつくす

休日茄子を燒いてひとりゐて乾いてゐるシヤツ　長野　八重田保朗

穗を揃へて風が吹いてゐる

風がもう秋のホップ棚に殘つてゐる陽　東京　清水和子

みんみん蟬が樹の中おぢさんなたまめきせるで

南瓜の葉つぱの明るい電燈少年戰士ハモニカ　濱松　渡邊天仙果

海の風おほらかな龍骨にとりついてる人々

波のいろも發動機の音も單調な潮べり青田　横濱　東信太郎

雁來紅このごろ卵うまぬ鷄が三羽ゐる

燒栗ふた粒鳩時計まいてゐる　北鮮　戸澤正一

高壓線の通つてゐる山の畑眞つ晝

玉蜀黍の葉のひるがへる陽を演習に出て行く　三重　楠卓子

暗いなりにも道のあつて星空

青い柿の葉青い柿の實嵐やんでゐる

土の香りの月夜を歩く

廣島　菅　無極

空襲のサイレンが、銀河が流れてゐる
老ひても渡守して子息はやはり海軍ですといふ
警戒の汽笛鳴り終り蜩鳴いてゐる　西宮　竹内孤明

雨あがりの夕陽が鋪道たうもろこしの葉
流れに洗ふものつけて晝の日が百日紅　大阪　梁瀬阿羅子

大君の邊にこそ死なめと征きし君の机そのまま
山も戰へ　斧のおと鶯の聲　吹田　多胡比左志

戰地の便りいつか途絶えてゐた
松の松かげ憩ふてゐて糸瓜咲いてゐた　神奈川療　中西國友

實朝の首塚ときく秋草疎開兒童大勢
涼しいうちに壕にはわしておいた南瓜も收穫　川越　井上暉一郎

安靜時間ちよつと眠り涼しい風になつてゐる
蟲鳴く毎晩納屋は閉めにゆく　横濱　近藤眞佐夫

秋は西日にはられた新聞の繪が褪せてゐる
さはればはぜる鳳仙花の實夕方になる　東京　椿本操

その道が近道で萩のある花のある道
行けば林の道栗の毬君もゆく　愛知　積木晃楓

ひまに風が出て工場の空地雨になつてゐる
壕へ疊をはこび出して月夜のひまの葉一　東京療　加藤喜一

ノックして秋風と手紙と看護婦さん、私は讀んでゐる
栗の毬が大きくなつてゐる空のいつもこの道　佐世保　長山林二

船で着いて夕日の家をたづねてゆく
たづねついて足を洗うてゐる家のまへのながれ　濠北　新村和也

ここに井戸を掘りいちにちといふ日のすぎし星座
このごろぶじとはがきにかくランプ雨ふる音である　東京　前田柳吉

晝月白いものたくさん干してゐる
風が葉を散らすのを見ながら君征く　横須賀　矢島寒雄

韮咲いてゐる道をお骨にしてもどる夕燒雲
秋がきてなにか病人に藥が變る　八幡　木村次子

驛の一隅梨の皮たらしてむいてゐて母子で
練習機が過ぎて雨となる遲れ咲きのばらの一りん　宮城療　加藤黛杉子

君が單衣の肩にある風逢へてゐる
つくつくぼうしここにも家が建つてゐる　東京　安田盧中火

いちじくに雨のふる君の訃である
このところ暑くジャワにゐた將校さん外出

蒔いた豆がここにもあこにもはえてきたさや豆　大阪　廣橋銅一

出船の航海燈のあかいだけがもやの中　和歌山　富田南龍子

松が二本寄り合うて空へ雨止んでゐる　川崎　佐藤忠美

私が歸つてうちの雀の歸つてゐる聲

月夜の枝がゆらいでゐるこほろぎないてゐる　岐阜　肥田案山子

濡れるほどな雨の休み日豆まいてゐる　大阪谷雨滴

桑の芽だいぶんのびた白ざしの山へ道

けふも雨の芽に雨のふり降りやまぬ

降る雨が病院の赤い屋根森に鳴くせみ　神戸　姫田千賀緒

金星朝顔の葉はすがれてゐる　川崎　深澤營介

橋がとほうもなく高くて川原枯れてゐる　千葉　長谷川清泉

青田のみちゆく一小隊二小隊山の夕陽　姫路　古城白鷺

遺骨を抱きいてふが散る式場へなほも散る　東京　鈴木水帆

散る花が雨の雨に散る　神戸　高柳登一

水兵さんたち氷屋の氷水筒に入れる蟬なく　京都　高橋又兵衛

工場の屋根が區切つてゐる　大阪　佐々木都女乃

宿直の朝は朝顔

藁屋根夕立するけむりあがつてゐる　廣島　青尾青天子

この手帳に彈痕があり血が黒くあり秋の文字があり　埼玉　龍澤流木

桑畑夕燒け桑摘んでゐる籠しよつてゐる　駐滿洲　市川滿哉

赤子の聲聞ゆる秋が照窓燈毎夜　駐中支　杉本幸一

山に日の落ちてからの雲の色軍歌演習　廣島　野北菊江

落柿ころげゆくを掃いてゆく朝よろし　兵庫　齋藤努

一日降りしが夕燒けてより音もなし　札幌　加藤隆

ビルのてつぺんの空にも蟬がゐる青空　熊本　西岡葉子

仔犬が仔犬にじやれたりしてれんげ畑夕日　平塚　望月英男

工場の裏にもゆれてゐるヒマ退けてくる　大阪　但馬義雄

皆出てゆくひとり豆をかんでゐる　千葉　加藤明

此處へ來れば海がみえる南瓜の花

ばかちのなつてゐるわら屋輕い風ふく　開城府　松村龍雲

けふも何事もなくて電柱のある風景かへる　廣島　槇原新逃水

するすると蛇が通つた烏瓜の花　佐賀　加藤白水境

軍歌演習雲のかたち木の上にある　東京　河田エミ子

少女モンペで山羊連れて草のたけの風　東京　野津歌代子

雨が降つてゐる山の方へ電柱が並んでゐる　大阪　松浪サワエ

夕日に舟が帆をはつてゐる次は須磨まで停らない電車で　神戸　中島芳水

朝は勅諭奉誦吾子茄子は咲いてゐる　福井　小坂昌子

小休止さて松林の白い雲です　福井　小坂迂人

月夜の隣が常會してゐる靡へゆく　福井　桑原多瑛

今年殘暑きびしくみの蟲もう葉の乏しく　東京　山口道夫

開け放した二階のつめたい物など湖廣し　群馬　鶴淵螢光

しづかにしづかにとんぼとる子と籠を持つ子、青空　東京　倉前忠勝

○　卍禪子選

願ひは癒ゆ日ばかりのうつらうつら九月のかなかな　東京　三國魚竿水

病室に秋となる月がまあるいこちらは窓　北海道　井上佐久良

湯氣も泡ぶくも人の情に泣かされた蟲鳴く風呂　名古屋　鈴木梅宇

癒えて白衣の赤十字のしみじみ紅い、とんぼう　茂

退院は高天肥馬といふ日ラヂオは國の民謠で　出征　倉持

とぶものぐりつゝ出でつゝ南瓜の花の奥深く　發航用意發航しぶきに若い裸像いかめし（演習）

見るに銀河濃し防空壕に深く身は居て　日朝點呼五ヶ條に今日がはじまる

月夜河の音あり蕎麥の花一面にして　戰車の軌跡はつきりかんな眞紅

鋪道に立ちあかいホヽヅキなめて居て女の兒　花卷　照井稗人

鹽田の中道道ありて人々水荷ひ居る朝

松が八月の陽に照り丘の松青くて

友の葬に來し菊畑

このお山の岩根つたひに飯盒洗ふ兵士ら

雲薄雲消えて富士裾を引く車窓

雲の峯ダムの鐵骨　横濱　田代濱女生

山の一本松でひぐらし啼いてから十五夜の月

秋近い雫になつてゐる松風

山へ向つて暑い陽の道を曲り

やがて今日の陽がおつる南瓜のつる

健やかに育くんで明るい日本の建設だ　東京　吉沼晴穂

大きく胸張つて今日の尊さをかみしめる

月が出さうだほのぼのと山明るい

神に祈つて默す夾竹桃の赤さ

夕燒夕燒蜻蛉は陽をちぢめる　横濱　佐藤鳴風子

葉の冷たさにふれ夕暮れになつて行く

哲學を讀めば灯とり蟲死ぬる日の近くに

雲が流れれば蟻の營みは止んだ

晝席志ん生聽いてるモンペの襟足に秋風　福岡　南畝三坡

赤襟十文字にその父一人きりの驛に送る

牛の瞳やさし疎開の荷つまれてゐる

青き柿の實噛りはだかの子のおちんちん

千人針千針目の一針を寅年の從妹こまつなぎ

いはるまゝ秋蠶掃く奉公のはげみ赤心

擊墜敵機人垣に田圃潰れ蟷螂錆びゆく

いまの戰局をみそなはすみ佛石膏像の古び（子規忌）　大阪　森谷乙山

カンナ赫し人に忘れられようとして秋に老いたる

秋の鴨川は山紫水明をきざみ夾竹桃暮れた

流舟網をひろげ水つく青葉が音絶えて

雨沛然と秋をつのり銀杏若き思出と絡る

水の激しい動きが聞えて反つて寂しい崖のあじさい　岩手　大森古天

土埃あげて峽ゆくバスも秋　福岡　峰松春風

枝豆の枝の豆をもぐ一つ一つ

枯芒バスの窓から犬きく搖れる　鹿兒島　石下谷乃不女

露顏に散ることも獻納のまぐさ刈る

月も初秋の背のほこり拂ひ合ふ

山畑の空高うなり鎌振る手馴れて來た

月の山葡萄つやつやと歸る仕度整ふ

放牧の馬丸々と並木のそこにある小川　福岡　峰松春風

阿蘇の原なるほど廣く目立つは飛穗の

青い海からずうつと昇つて行つた戰鬪機

兵征きし門の無花果はや熟れ　東京　小川一灯

法師蟬の風ひえびえと肌拭いてもらつてゐる

殘暑の日々の床に折鶴折り疲れてゐる

初あらし窓を鳴らして退院の荷が過ぎて行く

すべて戰ふ姿の秋を病む身つつしまれ　三重　河合英觀

集合喇叭鳴る夜明け前たしかに秋也

豫科練の歌うたひ君も子供になつてゐる　岩手　鎌田一相

朝は水やる南瓜の大きくなるそれを樂しむ子

みな嚴清水飲みかはるゞ僕も飲み　山形　渡邊舒生

風穗田をなびきお召を受けた胸をはり

穗田からやきお召を傳へ來た目と目からやき　臺南　坂元呑空

人ごみのなか男の子模型機をとばさんとす

百日紅の幹さすれば若葉わづかにゆらぎ

うすぐもる月あかり春菊の花が眞白にうつくしく　千葉　石井義雄

曇天の林靜かに病葉ふる

青葡萄に育ちし家のなつかしさ

夕燒の托兒いつもの歌で母に待たれてゐる　福島　萩原アッ子

學童寢靜まつてあまりに夜が早すぎる（集團疎開）

額が見馴れて朝の涼風を入れる

發車のベルだ學童の顏が眞劍になる　東京　八木三女

風が秋めいて黍の葉鳴がたくましく

小馬賣られゆくまひるのつかれ

向日葵動き出す小馬のいなゝき　岩手　高橋長太郎

子等繪描くことごとが戰爭、赤い色

深山何の香もなく神苑のきり

百合匂ふ部屋くれてきた　岩手　鎌田一相

秋の日は赤い土藏の干し物

勤勞の足で野ばらの匂ふ夕べを來る

ひまわりの陽は強く晝のとんぼ　岩手　佐藤大峯

もう一と雨のこの白萩の蕾

このしづかな溫泉宿は星いちめんの水音

回覽板がよちよちところんだりして　東京　奥村そのえ

あれこれ繕物なかに母と向きあふ夜長

厨せばめていかめしさ父が勞作のかぼちや

こほろぎ油なめるもゐて厨に灯し　海南島　中澤春帆

スコール去つて火焰樹の葉に躍る月光

丘に登れば半島もほのと明けて澄める大氣に

大みそらに國旗するするとユーカリを渡る風　福岡　佐藤徹夫

晝休となれば機械一齊に止る暑さ

少年機械と取組んでゐる燒けつく鐵板

やつと輕便車に腰卸せて日の炒付くばかり　比島　加藤瑞穗

雨いつか晴れサンパギタの花馨る營庭

マスト折れ沈みし敵艦に熟風微の笑

お茶をつぐ竹のコップも涼しくて芭蕉の蔭　四日市　川津一之

七月の海の底うねり士氣昂揚さらに深く

七夕をつる夜さの遺児と知らざりき　東京　小山美智子

防空壕おみな夕立の水かへ出してゐる　東京　吉池良子

血の潮騒は落日を天に返すと見たり（サイパン）　東京　相馬樹翠

完全軍装の兵たちに入日さし驛の小休止　川崎　古川直右

一人の力捧げ花捧げその時の覺悟胸に　東京　木村貢

烈日戰車の響青葉へあがる砂塵疾き　三重　高島五朗

倒れてゐる道しるべ讀めば讀める萩の花かぶり　伊那　池上耕山

鈴蟲も鳴いて牧場のえぞ菊に風の流れ　伊那　伊藤藤比古

警鈴は鳴る銀河南に流れてゐる　伊那　池上耕山

空襲だ子らはたたき追ふ赤蜻蛉　樺太　岩舘昌子

敵機けふもなく次々烏賊舟茜に染まり　東京　岩舘テル子

しら〳〵ボプラ霧はらふ朝の小犬土掻き　東京　岩舘テル子

點檢の待避壕の中幼兒乳を呑んでゐる　東京　渡邊まき子

家庭園藝の放送に主婦濡手のまゝ耳立て　東京　渡邊まき子

用水桶二階に置き鴉鳴きすぎる　浦和　千葉大帆

鏡に顔をうつし笑つてもみる秋朝　浦和　千葉大帆

この路お大師様へ月明りの稻がゆたか　東京　樫木万美

土手のさみどり夕は山羊の聲々　東京　小山美智子

疲れ切つた部屋の殘置燈が眼にしみる　東京　小山美智子

朝南風露草の露土にしみ入る　東京　相馬樹翠

手折りし螢草朝露にしたゝる　東京　相馬樹翠

夕月青い蠶に坐る　岩手　谷地畝志郷

雪が雨になつて驛場へ馬の行く　岩手　谷地畝志郷

田植あがりは寒く青田水向けにゆく　伊那　伊藤藤比古

得々繪葉書寄せつゝ椰子舌鼓する面　伊那　池上耕山

盆の骨のばしお隣も玉蜀黍の燒き香ずれ　伊那　池上耕山

かんかん照つたるおらは百姓やんれ立秋　長野　上條無庵

電動機三馬力男も女もわれも汗に汗しつゝ　横須賀　朝倉登代子

朝顏夕顏せつせ通勤の工員たち　横須賀　朝倉登代子

下駄と葡萄酒かアこれは特別賞與つていふ感じ　浦和　千葉大帆

お諏を盜られたいぢらし近まにそんな人あるもへば　浦和　中村竹雨

魅惑おとなでさへ罪なとおもふ甘柿たわわ　浦和　中村竹雨

園丁釣る子を追ふにも木の蔭にゐて手を振る炎天　浦和　中村竹雨

追はれても追はれても小さき釣師は公園の石崖　浦和　中村竹雨

一碧樓選

○

夏風の山門力をこめて署名す　般若心經　浦和　戸島　三更

雜炊食うべ汗も油ぼくて土用過ぎた風　浦和　佐藤　無角

街を流れてどすぐろい川今年の西瓜あるにはある　浦和　戸田　まゆみ

百合の花に戻りては高舞ふ蝶の子に追はれ　浦和　田中　加六

炊出訓練のおすびを食ふ庭のべの百日紅　浦和　西牧　言人

墓より灯して戻り佛壇の前の家人　浦和　會田　明

土煙夏空を掩ひ森を飛び立つ一機二機　浦和　立花　しげり

屋上朝禮するが見え戰果の報道版　浦和　木本　梵天

小鳥餌を待ちかねてゐる煙草買うて戻り　浦和　戸田　みゆき

湯上り打粉の兒を抱き糸瓜見するなど　浦和　丸山　羊三

娘學生として軍服何枚か仕上げて戻り　東京　横山　主計

光芒止みてスヰッチ切れば地蟲なく（電氣鎔接）　三重　田中　富士郎

作業開始皆なハンドルを強く握り初秋　友皆んな征つたふるさとの彼岸花盛り

○

空に鳥の道あり日々爽涼をおぼえ　沼津　伊藤　彌太

秋の日英靈を描く軍服の匂ひを感じ

軒くらくゐて軒近き空に月あり

河原をかたかなの方へ歩む子の足どり　〇〇隊　本間　昇

無言兵と馬と蓮池のそばを通り

雲ひくう七月棉畠のぬかるみ

俺と軍犬と知つてゐるこの道棉の花咲き

闇をもの云ふて去る戰友に粟のすれる音する　丸龜　佐藤　保民

野のみづそつちにも流れこれのつゆくさ

涼しさ鰡つりの鈴がなり觝

星夜星ふるやうな舟板やどかりがゐて

蚤をひく匂ひ窓あれば夕日し　秋田　村上　呂半

山ぶだうのびるところまた夏雲へ向ふ

蚊遣の煙満つ妻子と飯をたべて

日焼の腕いだく幼くて男の子

一艘鰡舟がゆくずつとひくい海面　石川　松原　颯々

山霧しだいに夜明け皇土稻刈りびと

百日紅終日かげり鶏ら一群れ

みな知合ひ征くひともたべて茄子の丸煮

杣のこゑ霧はれてくる谿の朝　越後　細山金剛

大きい田の一方より入り耕す夫婦のもの言はず

くるみ枝張りて茂り潟の水ひくゝ

藻刈舟の一艘がひろい潟ぐち

稻の穗稚し山から河から吹く風　秋田　石岡水鳴

坑口をいで草の穗黄いろくあり

鬼灯と子供と居るくらくなる畑

蟲喰ひすもゝ幼きが掌にのこり

整備兵がゐる地が明るい草の穗　宮城縣　島林庄作

山峡向日葵一叢にある暮色

野菊咲きこのみちをあゆみくる少女

これら鬪病のくらし大根の葉が大きい

穗草穗青ければ川水のながれ　山形　澤渡尙之

かたく仕立ありしつゝじの下草茂り

紫苑淡紫に揃ひ低きは蕾にて

大壁いつぱい蔦の葉その中に蔦の實　東京　中根尉策

星を見あかず風が一方の窓を吹き入り

男が住む夜の庭のとまと實が生り

疎開の子を託す氣持山と山あひの芋畑　立川　守矢日出男

草が穗がうごかない朝霧うすく

耐久運轉つゞける發動機の轟音が秋夜

山々青く沈むやう光る野の星　愛知　鈴木一斗石

夏の雲窓に硯を寄せし筆をとりし

撫子の花咲けりひくい水音

夏夜うすい灯の下に鉢の草の花白い　新潟　三雲城東

はつか水いたゞく磧の一方眩しい

妻がものに夏蠶飼へば桑一木わくら葉

馬に跨れば窪地からくる夏風　〇〇隊　中恒三郎

幕舍しめつぽいその中にて住み草花一枝

銀漢南に裾野一體を夜を羅針してすゝむ

われに來てとんぼう動かない草つぽ動かない夏山　佐渡　金子璽人

眞夏空に雲なく女子挺身隊出で行く

夕べ暑さおとろへし藪の深さをのぞく

いづこも麥の穗の稔り卷脚絆をつける　大阪　大倉芝青

釜ひとつ竈にかゝり・厨夏朝

草原壯行會の終りたり

川べり人についてあるく夏の日藻草が匂ひ　東京　米田喜雨

山に來て水を飲むあたりの冷たさ

秋草のびたる夫婦は年輩である

山迫る村の柿あかく必勝の心湧く　香川　新田巣州

眞夏枯枝を折りとり蟬の聲をきく

蟬が椅一面になきその下の小さな御堂

夕闇七夕竹をかついで來た少年の顔定かならず　愛知　鈴木邱石

炎天唐菖蒲剪りて人の去にたり

その日射干咲いてゐた低い木しげり

こゝに仁吉の墓いしだたみ歩き花百日紅　北支　万代鰐平

眼つむれば木々浮ぶ蟬の鳴く木々

山鳩啼き箒草蠹々炎天

夏日烈々飛び去り飛び來り蜂は　名古屋　平井青三

炎天の空雲のなく誰も空を見ず

路上一燈をかゝげ征く壯行の夏夜

船つくるに砂が灼け炎天潮のうねり　青森　井上星樹

木苺熟れ母子に丈高き女郎花も咲けり

泳ぎ子二三人岩に立ち沖の方雲のかげりて

もろこし穗を垂れ家近し家々　宮城療　齋藤達也

戻りみちに咲いた母子草の黄を愛す

蟬ずれの音か涼風になつて山療

秋夜を覺めて輕機分解の手順追ふ男　岡山　豐田芳生

溝萩のしげりそのまゝの暮し朝々

こゝから炎天の海が見え門内

さるすべりの一木ありこの日人を迎へ　岡山　仙田黄嵩

秋空澄みし配給を受ける人等

いも畑びつしり蠹を張り山のかげあり

無花果熟れてゐるへ來し朝をもの云ふ　岡山　黒瀬潮鳴

お盆地が固い地の野人參

夏潮に舟を流し一本釣の暮し

かゞしを吹く風盆過ぎし黍畑　〇〇隊　鈴木一石

砂丘にあかしや茂る砂丘を登りつめる

月明兵にひとゝき小魚藻に腹みせたりする

そして彈藥分散作業砂に生え青い實の蔓梅　新潟　小川光明樹

水にみづすまし合歡の花のすぎつゝ

珠數玉青き實の生りしを家に入る

堰ぴつたりしまりをり萍花咲いて　香川　中野健三

油をおろしトラックにて走る稻田も家も秋夜

家あり山あり稻田ひろびろ暑さ秋になる

茗荷へあさも水夜も水一杯をかけ　東京　金内錫四

夾竹桃咲くに女人行くに微風ありて

境内木影を歩き合歡咲き出でし

家々窓ありて屋根の勾配眞夏日中　尼崎小宮洗介

朝日雁來紅立つに衝りすく〳〵莖のびるはだしで肥をやる朝　秋田佐藤西邑

胡麻の花さくそこから聲かけて妻　新潟高橋日東子

栗の毬みどりこの空を守らう　秋田高橋安榮

水さゞなみ殘暑岩に釣る人　紀伊鹽崎杉月

君征く讃符いたゞく山栗をおいて　秋田高橋安榮

はつきり水引の花と思ふ水に陽が射し　長岡藤田三六亭

菱の實を採り向ふの岸昏れてくる　長岡藤田三六亭

牝鷄が鳴くお盆すぎた界隈　長岡藤田三六亭

女工員工場をさがる道向日葵垂れてあり　信濃中村仁

歩いても歩いても月下の荒地風が涼しい　信濃中村仁

增築の木柵つくつくほうしとまつたりもする　信濃中村仁

池あり畔にすわれば白いそばの花　和歌山保田重藏

りんごよく實つた草深き草刈る男　和歌山保田重藏

青草ふんで來籠の草山羊にやる　和歌山保田重藏

斜陽とまとの熟れ殘りし校庭　東京坂岸桂保

露ふみふみこの道遠しお宮への道　東京坂岸桂保

筧の音しばらくやみし風强う秋夜　東京坂岸桂保

林檎冷いを噛りつゝ鼠多きを知つて　尼崎小宮洗介

藪陰寒し鷄も僕もこの日南に居て　尼崎小宮洗介

雪まだ降らぬを少年工員鐵材運搬す　秋田佐藤西邑

深い樹木深い中蟬がやんだ　秋田佐藤西邑

蟲は鳴いて蟲はずつと夜に入りきる　紀伊鹽崎杉月

友情をかんじる大根葉になる　紀伊鹽崎杉月

汗ばむを部屋を出でず肩章のうすく光り持つ　諏訪中村常男

軍隊ことばで話す我等秋夜の水をいたゞく　諏訪中村常男

母は來の子をもちて青い蜜柑の話など　諏訪中村常男

林檎に手のとゞく農人だけの道を來た　尼崎永瀧延太郎

百日紅咲いてる食事訓の聲する　尼崎永瀧延太郎

白木槿咲く海岸道場へあるく　尼崎永瀧延太郎

われら壕を掘る星夜いく日もつゞき　東京上木葉

こゝに待避壕完成し人と話す夏宵　東京上木葉

少女工少年工にまじりて國旗揭揚の夏朝　東京上木葉

鬪魂の花生けてある旋盤にスイッチ入れる　宮城療村上幸吉

地に牛が臥し土に根を張る草　宮城療村上幸吉

日蓮宗の山咲きそめた白い草花が風にゆるゝ　宮城療村上幸吉

青草にすわり決意海が見えて　宮城療村上幸吉

海を信じ海に征く君に土用浪がつゞく　宮城療村上幸吉

試歩の杖かろし向日葵わが肩の高さに　青森　工藤折葉

兒を負ふ妻まぎれずゐる七夕祭の宵の人出　宮城　小野寺青愁

警戒解け書をすでに鳴らす宵の七夕太鼓　〇〇隊　大淵青柴

雨雲どん〳〵西へ流る〻空なり野菊なり　備前　二宮香芽子

山にひた迫るきもち花野に閑居する　東京　松本薫

おともしをしてみたまむかへ野菊うすむらさき　新潟　丸山白水

流れは様々の水草一ぱい白い小さい花　倉敷　上田默平

朝仰ぐ青い秋空この塔の下に來て　會津　渡部東迷路

草ひかる朝の道を乘馬の人のすがた　佐渡　龍浪龍雄

風が涼しい木の下の學徒の圓陣　岡山　岡丁字路

人住み葡萄に山の光りあり　茨城　佐藤かめ雄

百日紅窓の近くにあり松葉牡丹地にあり　東京　家弓正紀

百日紅炊煙に暮る〻路次　北海道　小松天士

船待つ人にまじり夏の朝を聞近の鷗　東京　佐藤かめ雄

境内新しい土でまざ〳〵茄子畑　愛知　大橋万々夫

秋海棠少しゆれた机に坐す　宮城　小野寺青愁

九月青田驚しろい輪をゑがき　東京　松本薫

庭先むしろしいて夕食のひぐらし　東京　松本薫

夕顔の花ひらく頃海へ行くお茶のんでゐる男　尼崎　山内謙吾

石置場に咲いてゐる菊芋をこどもが折つてゐる　東京　眞野たける

宵閣の秋野道を歩いて空が廣い　新潟　八木茶凡

熱鐵を打叩く地響きばらの花ゆれてゐる　美作　淺野一草子

青桐の蔭の馬にふとこゝろひかれて私　東京　家弓正紀

枝と枝と春の白雲　朝涼し蜜蜂動くしろき花　佐渡　三國詩浪

星滿天あす征く身に磯の香いつぱい　東京　佐藤かめ雄

鐵橋渡る車窓秋陽となり船見ゆまばら　北海道　小松天士

涼しく夕餉の粥を了へ夕燒雲

近作鈔

○井泉水選

朝々淡路が水にその島ほどの島のこと想へ　明石　三好叢一路

暫くマッチの硫黄の燃えるのを待つて居るやうな友情

休日はしづかにからだやすめてゐるはだか

朝はアカシヤ花降る園草買ふ列にはならばず

青年きみの掘一つないからだしづかに海が夏の盛り　福岡　武鑓青杏子

月の夜はしみじみ君もサイパンにゐたはづだ

雲の峯へ無線塔の正確な夏の構圖

橋があつて渡る影、と夏の朝がうつり

浪が浪へ新月のほのかな光をもつ、決意

満月の勤論朗々と奉讀するのが筑紫山なみ　鳥取　井上有紀男

竹の皮かろうかはいて供出とて束ねて一山

讀んでゐる本と昏らくなると暮れてくる木が秋

稻の花二百十日平穏田のまへの家ひるめしどき

木の下丸く濡れない雨がふつてやんでゐる

地震から少しぬるくなつた湯とおもふ落ちる葉

そとの秋が花のある草などみほとけに灯をともし（弟戰死す）　栃木　栃本よし雄

蚊火がすうつとこんな暗い晩公報でも來さうな

いなづまが庭のもの見せたりする晩でまた思ひ出してゐる

月のまへの雲がずんずんゆく英靈にみあかし

ベルト止めようとしないしんけんな顔が今夜もいなづま　栃木　日向野千一路

木がくれてゐる春の子供たちのこゑ

風の葉うらには桃の、征くべき時が近づいてゐる

御遺骨お迎へふるさとの山や川やゆだちする

月と蟲鳴く待避壕の口も

この驛建の花咲く一人の兵を送り　豊橋　鈴木折嶺

好いごまのごまの花寺の内月夜にしてゐる

暑かつた日がおちないでゐる並木道工場が退けてくる學徒たち

月がまあるい幕舍が四角な兵隊出はいりする

雲が朝のいろになる井戸のふた

お盆學校かへりのかばん墓のそばにおき參る　銃子　名雪理輝

あさ一と雨きて流れてゐるみぞ、溝萩

やすやすと暮れてゐる空が稻へ水をかつぎ終り

あつい日がかげるとうまごやうまのかほ

粟に青い毬がつけば山の朝風　朝鮮　山本木天藝

水に豆腐のかたちしろい夏の日午後

竹の靜がさはくりのけむりすこし夏夕

佛飯しろうして朝のかなかな

薄暮すずしくむき合ひて坐り湖の中

群馬　鹽崎寸南夫

ぽつりと山羊白い利根川堤　　月かかり

蟇ゆうらりゆらり二階廻になつてゐる

茂左衛門様刑場跡も畑してあるぢやがいも花もち

ネムの花や沼田町榛名坂午さがり

白く木槿の花であり青田夕明りする墓であり

新潟　皆川蓼二

先生に敬禮少年團朝は蓮が匂ふてゐる道

かやつり草疎開の子供むかひに出てゐる

朝々まひき空が澄んでくると伊夜日子久賀彌

乏しさも身についた日々へちまの花のきいろし

あめがひかりとなるかへでの葉

石川　高崎貞之

舟小屋の屋根の草も海も雨

八時うつても青い空咲いてゐる

子供連つばひろの帽子麥の熟れてゐるみち

さんごじゆの月夜になる

夜が雨にぬれて雨やんでゐる

長崎　森久樹男

土用波の船繋ぐ綱なげた

貯水池のあめを白い鳥林の中は傘のいらない

柿の木に青柿のある通りあめ、修道女さん通ります

父のたばこぼんのこつてゐる煙草のまないわたしに、きりぎりす

防空頭巾そろつてこども朝早くとんぼ警報解除（八月十一日）

愛媛　佐伯美則

たうきびの風がさらさら人を逐つてもどる

昏れるに染り易き浮雲の海に近い橋渡る

蓼が小枝を捉へて昏れきらない月がある

暑かつた日が海に入るはねつるべ

ごまの花の白い隣はトマトの赤い明るくして降る

駐〇〇　小林雪後

青田の中のいつけんもおまつり

何はなくともすずみにあるくことか幾重燈はすずし

つきのあかりのぶだうのふさ

日がさすと朝蜂が巣から出てゆくあらしのあと

月からとどいた一句さらさらかいてゐる

福岡　鹿谷皓樹

それからは月を天心にして水が流れてくる

窗の四五軒警戒解除

山がひるからかげると郵便車がきてゐる塀のおちば

供出ものすつかりだした柿に實がある

霧が牛乳の、軍艦が巣子のやうな水兵さんのあと子供がとほる

警報が出ても動いてゐる人青田木槿さくところにも

東京　金子蓉郷

朝から座席も空いて涼しく奥羽線ずうつとあめ

擬寶珠の葉に雨おとけふも涼しく母とゐる

鳥なけば鶏もなきあけしらむ馬鈴薯畑の花

夏の月は十三夜ごろの林檎は紙袋のなか

東京　木村乙羊

夏草丈なす家が建つ人らにて唄ふ

風が通つて雨が通つて雫してゐる大工小屋

もぐけは白し遺骨のないぐやみうけてゐる

そこまできがついてくれる人があるので蟲の聲

平塚瀧由　重三

印刷機械がよなべしてゐるいい月のへちまの花で
征かせてからはむくげの花も、こんな靜かな朝を掃きます
草を漁く雲の、山羊はしづかにたべてをる秋
紫苑の丈けや看護婦さんも出てゐて月のよい晩
月夜の海が、牛を鳴かせて通る（遊歩道路）

東京　平松星童

大きな梨二つに割り月夜の空氣いつぱい
青葉の兒童圖書館木の椅子かげふかくしてゐる
夜よりくらい家のかたち星があつて夏
みじかいゆかたで日焼けた子供うらぼん
此の體國に捧げた體で夏やせして裸

横濱　東松八洲雄

屋根に南瓜遣はせて局長とその娘三等局
こども背の順に並んで丘をゆく風が黍の穗
洋館藥家夕日海の近いかなかな
雲が暖かく馬の脚洗うてゐる葦の芽
山からきれいな水が流れてくる祭の太鼓

東京　三浦清一

大澤も召されていつたあとの雲に月を覗かせておく
配給の林檎は聖書の上にのせたまま秋日うつくし
蟲叩きは手の屆くところにあつて朝は平熱になつてゐる
わくらばおちつくすと烏瓜ひとつが君のものにて（北村透谷墓）
どつちを見ても垂穗の勤勞隊員として乘つてゐる

東京　親井幸牛花

葉を吹きわたり花に照り
海すでに秋のうみどり

東京　岡浩二

岩はなの草の夏果つ
木のなかの燈をけす
道の秋を子どもへ歸る
警報出ざうな今日も出なくて鉢植の茄子
兵も馬も演習歸りと云つたやうな柿はいろづく
蓮田蓮の花宿舍の屋根ふとん干してゐる
ポストがあつて雜貨屋さんの前いもの蔓
空が涼しくこども疎開してからのてふてふ日中だけ

栃木　植田市籠

風鈴やどやが二軒並んでゐる
暫くすると消えてしまふ陽が花一つない部屋
警報一號雨が一日茄子の花に降つてゐる
秋になつた櫻の木もつ家が一軒
ねむの花水車の上雨が降つてゐる

東京　木村飛泉子

まだ暑い日の蔓草の花敵國大使館うら
移動演劇隊は馬車で稻がすつかり花である
排水工事の水が流れ並木葉櫻の道が朝
赤まんま草道の水音跨いではゆく

東京　橋本淳一

霞々と道東西に夕蟬の鳴かざる日はなし
山青萩が風にふかれてゐる
野も山もしとど露一番バス發す
白い花木槿海でぬらした髪を梳いて

鳥取　重村百堂

山に山の滿月になつて家のよこ水田
日が落ちてもあかるくて麥熟れた夕飯どき
家の裏まで田が植つたこの家の白い猫
子が受驗する赤鉛筆青鉛筆庭の木夏になる
戰へ伐りこのあたり山を伐る音の畑を打つ

東京　佐藤康治

働いてかたい爪奉公袋にいれる爪きる
まつりとてしづかなひる畑の唐黍のたけ
山くろく月が桑畑に照り蠶飼する家
工場退けて出ると櫻の枝もつて通る人の雨やんだところ
祭のちやうちんも消すとくろぐろと杉山杉のさき

鎌倉　鈴木蜻郎

產れてきて綿帽子きてゐる窓の白梅（女兒安產）
橋を人がとほり電車がとほる土用波が川口
なみおと、本へ枝折しておく
すずしく蓮田に蓮咲いてゐる學校へ並んで通る
霜とける陽が柿の木牛に車つけてゐる

伊豆　佐藤專子

青田と川と朝日は湯けむりへさす（下加茂）
井戸使はせてもらふ朝々の櫻んぼ
朝靄のなか人の顏征く者を先頭に來る
いそやまをちかく通る船のなつたけた山はだ
うちつづく工業地帶を車窓にして夏朝速度

靜岡　澤木正

店に筍があつたりして何もない町のてふてふ
月夜あかるしたうもろこしの葉に風のあつて涼し
夕べ雲があかるくなりそれから昏れてゆく櫻もみぢ
ちよつと小降りになつて櫻の葉がちる厄日すぎてゐる
蚊のあしのやうになつた脚まで秋の蚊の寄る

熊本　木庭皓龍子

君征きし春うららか遺骨いま歸る烈日に耐へて
銅像がない公園かぼちやの花靜かな雨ふる
とつぷり日の落つる巖にあるなみ
水門うづまく朝靄を小さな日の丸あげてゆく船
滿ちきつた潮から卷く錨のしづくする朝が秋

松山　村瀨汀火骨

照れば、降ればふるで青田青きはみ
警報それからの月が白い港のうち
きびの穗あわの穗月夜の雲が走るので
戰苛烈にして蓮の花の端麗
訓練は二機三機と嵐の風ののこりゐる

宇都宮　西東八十八

石の山見えてくる水音バス徐行ぎび畑を曲り（井師と大谷行）
青葉白い雲バスの終點石伐つてゐる
南瓜の花晝にする坑夫三人となる
山も庭も動き入るるやと晝の盃さして裸

東京　岡野宵火

ゴッホのあいそらこめ粒ほどなしろし編隊機のゆく
あさ愛國行進曲口笛でゆく靄の雜木をゆく
梢に鳥濡るるかたち雨の篠つくさまとなりくる
きめふけふ南瓜の葉の大いさ夕餉のまへにみる

朝鮮本多閣嶺

蟲こゑの浪音の朝早き砂のあしあと

夏朝ラジオ體操舟が港にはいる笛ふく

朝から暑い陽青い海床屋の鏡に

夏を夜にして内務班員の花と灯である

酒田　佐藤逸仙子

月夜の炎堤が白い燈臺を秋たつ浪をしづかに護つてゐる

爆音日に日に暑い空になるかぼちやのつる

夕やけ、岩の木が風いでゐる

森の中道があつて牛のゐる朝の日もれてゐる

愛知　田島素琴

あさは雀きびのはたけの鳴子ひとりでになる

あたたかい麥めしみんなで今日も田の草へゆく

朝をけたたましく鳴く鵙のぬき菜汁のかをり

まだゐる蠅に棕梱の蠅たたきなど病んでゐる

東京　村田白鵜

雲の上の御事次に戰況の事朝から秋晴れ

日の落ちかけの雲で濟のうつ巖にゐる鳥

唐辛子の花まだ暑し少年勤勞動員

夜明けの風が工場には灯のある雜木林

大阪　南川鴻亮

まだ暑いものの秋は葉の散る學校のオルガン

雨ならもうやんで炎するにゆく遠い山の線

役場の窓明けてあつて茂り老いてゐる朝、日ざし

空があり池があつて夕べ歸る

東京　宇賀周央

疎開する子に殘る子も芋の飯あたたかく

蓖麻いちめんの向ふ部隊の行進する、靄

煙草買ふ列の長く朝から暑くて其中

栃木　日向野秀策

村に乾草のにほひまつりらしくばあさんさんにん

あらしにむいて低空ゆく一機もろこしばたけ

月夜が、うさぎのにげてゐるいもばたけ

東京　角田重信

秋草白くさいたのもさし學校仕事してゐる

あきくさつぼみをもつながれにでる

風が拭つてしまつた秋の空です

東京　淨心寺惇

炎天、黒い傘で來られたたつた一人の叔父

月は工場と工場の間をわが影と歩く

鰯雲味方機二三小さく見えてよし

鎌倉　遠藤虹水

戸塚大船ここにも出征がある稻の花雨になる

學校もかぼちやばたけで秋になるオルガン音のしてゐる

山に雲のわく雲の秋めけば山のかたち

横濱　青木青夫

毎朝通る橋けふは傘さして雨の壓が出てゐる

雜草の中のお墓として花咲く草の一本

雲もあれ氣味のかたち決戰といふにかく秋

函館　並木緑朗

ここには鐵が眞紅にどろどろと流れてゐる銃後

箱の中鶏とひよこと朝夕は寂しくて

焚火の色が美しうなつて朝奉仕に集つてくる　八幡　木村幸雄
水をかすめて飛ぶものが一羽多になる
夜はまだ冷える明日は招魂祭といふ満天の星　駐〇〇　法雲寺三郎
秋になる雨の暮れ遅いヒマの葉のしづく
手旗信號は子供らも讀めて本日は晴天なり　平塚　青木美岐雄
棚の皿のぶだうにお住持さんと客のわたし
學校へこの道麥刈り伏せてあることも久しく雨のない　駐〇〇　畠山實治
雨のあと果樹園の茂りふかくなつてゐる道
夾竹桃の花に朝の日ささないうちの白いにはとり
この身肉彈とすべき戰抜を點々百合の花くもり　福岡　井形春一
闇へ吸はれゆく部隊を通してゐる部隊の中の兵である
敵情は、月のさしてくる蟲の聲がずうつと草
松原松葉杖の兵も散歩してゐる海が秋　尼崎　林葉柳子
青葦の橋が船をとほしてゐる月が雲をはなれたところ
夕焼けふもうつくしく菱の實とりの娘さん
くろくろと森、日ざかりの道は森へ行く　但馬　岡田琅玕
蓮の花くづるる牛車の通る
曉の小波に洗ふ
嵐のそれた雲の、月夜の風のあるヒマの葉
少年航空兵ひざに兩手を窓が青田故郷近い　沼津　内久根聖巳
足洗ふ洗れが毎日洗れ草の穗夏のをはり
休憩時間が月夜であることも風が秋である　東京　落窪京太郎
征くを送りてかへり征く日を待つ萩の花咲く
秋が、すしやのくろい屋根ぬらしてやんだあめ
相すまんことだらけのお墓の草とる　松山　高橋一洵
倒れて起きて咲いて實となる
てふてふ渡つてゆくあとを渡つてゆく　長岡　小原甲陵
みち草露にぬれてゐる朝かげ幌をはづして行く
この道稻田の中の蓮田へつづいてゐる道
學徒戰闘帽で勤勞の夕焼雲となる　熊本　白石獸忍禱
歩けば影、影あれば雀の何か鳴しくて冬
いちじゆくすがれてまだ少し葉をつけてゐて晴れ
阿蘇からむくむく雲が監視哨へ風ふきとほる　神戸　野中白浪子
牧舍のダリヤが草原風ふいてくる夕
川はばの鐵橋を滿載の汽車で空襲必至といふ夏　濱松　細谷野蕗
疎開學童なら隊列でここことしのこの稻のできばえ
たうがらしの葉もうまし戰時老いてかくしやく
曉の涼しき汽車にゐて稻の穗いづる

岡山　近藤次良

落葉一せいにふる葉となつてふる此時
つめたい石があつて腰かけてゐる月の明るい
晩久しぶりの雨の稲の花である

大阪　三浦香女

月、森がくれて鳴いてゐる

東京　藻谷草土史

夜が月夜になるとほんのり柿の木の柿
家根にかぼちや家には赤ちやんおとなしい
茄子の花秋ちかい歯ぶらし使ふてゐる

横須賀　渡邊功平太

遮蔽燈があつて、親子ばかりの送別會にゆく（小幸疎開）
疎開の子を想へば團扇が白い　眞夜中

東京　夏堀望子

たまさか配給の豆腐とうちのめうがも夏の日かげに
たうがらし青く匂ふ朝の爆音も秋らしく

横濱　小林不惜

稲の穂の色ここら小川あふれてゐる
塀があつて影が秋、みのむし

東京　三輪薫

木槿の花おひるすぎの通風筒がまはりだしたところ
萩の花咲くかならず毎年此の日お墓へまゐる

濱松　田中貫川

遠く空の一角が海夏木立木を伐り
唐黍の葉よれよれに照り南方決戰日々

信濃　關口江畔

かなまじりのいしぶみ睡蓮咲いてゐる
戰爭八年年寄りとして蒔くものを蒔く

神戸　磯崎雄一

職工とは、戰士として朝々征くこころ夏の雲
朝蟬の、只今湊川神社御神殿通過

新潟　目黒亮助

烈日の影深く墓標首を垂れる（山本元帥墓）
梅も柿も青葉の中に青い實の元帥の家か

泰國　新納香樹

警戒の鐘が夏の山々の姿滿月である（福岡にて）
ビルの斜面へふる夏の雨に坐つてゐる椅子

沼津　山田梅軒

うちのヒマ屋根迄とどき夕べは月が出る
兩側のヒマよく育ち富士見えるこの道

濱松　内田六郎

山かひ牛を洗ひ秋の陽のまだある流れ
こどもら米英撃滅拍子木今晩月夜

福井　森田十雨

明日も暑さうな日向葵の暮れてむきむき
稲刈り日和の雲に爆音

仙臺　芦立陶抄子

ちつてもちつても木の葉
皿に果物のにほひも月の夜會つてゐる

德山　青木水仙花

待つまの暮れてきた山や空や蕎麥の花
壕へ疊も運び出してからのこほろぎ

兵庫　金平二火

一日休んで夜るがきてゐる風がはつ夏
山の稜線けさもう秋、戰闘帽の挺身隊としてゆく

京都　荻原荻

滅敵祈願けふもいものつるのびてゆく
その時ははらをきるつもりでひまはりのはな

大阪　大西八紘子

花つけ實をつけて草が秋の機械が壹のお休みです
晴れて草の實小さなしづけさも戰ひさ中

福岡　實

ガーベラの赤さ朝つゆ今日は砂糖の配給がある
やうやく降つて止んで秋になつてゐるとんぼ

長野　太田鐵石

けさ秋めく霧のながれ茗荷花もつ
三人の子供征かせて馬草ほして蝶々

川越　横闥碧樓

夕燒が赤いすだれまいて掃く
この道間違でもあるまい道馬鈴薯の花

長崎　小西佛舍利

玉蜀黍のふさのまだ白い朝つゆにぬれて
黒い親猫白い小猫とダリヤ咲いてゐる

秋田　增村辰郎

虹明りして稻束のうへの笠
いまさら不孝者であることを、草刈る鎌があまりにきれる（母逝く）

山形　齋藤てつ人

里は山羊もみそ萩咲いた小流れ

福岡　津田笹彦

床屋が休みでその横の青い島のあめあがり、秋
あさ海をゆくポンポン舟の音もあまり遠くない蚊帳の中

海とぬれた屋根が月夜であるみかんの木のみかん
秋といつてもまた團扇がいる兵隊さん皿のいり豆

山の池のところも通つて山へかへる英靈すすきをばな
つくづく征かれぬ體であることのつくつくぼうし

神戸　田中井夢

船にのる烈日の列の子をつれて妻も
木槿の花が此のいへ月が雲を出る

此の町の映畫館で廣い青田の空の雲で、山
木船つくる音が日和つづきのとんぼ

厄日前の滿月が田のそばながれてゐる水
朝日が出るとまだ川つぶち桑がみどり

福岡　品川幸一郎

雨はれた道標が一ぽん道が一ぽん
月が出て月の雲スタンドなど秋

秋が浪立ちてゐる赤十字社の屋根にある旗
秋が暑くて消防自動車がゐる公園葉のちる

夕空わたしがわたしの部屋にゐる

石川　片岡樹裏人

しらくもゆききする青い空があつて竹のなかにも
さらさら流れ、菅のながき干して干せてゐる

碑、紺碧のあぢさひの花になりてゐなり
麻の葉麻の葉かぜすこし立ちて來しやうす家々

低い窓で月になつてゐたので俵の編み目

○ 卍禪子選

百日紅花咲き女子挺身隊を送る　上海大島葬花

一杯の水にも闘魂バケツに汲めば

電燈に覆が垂れ覆の裏赤い夏夕

空が碧いので白雲ぐんぐん通る隼

サイパンを憶ふ

繆らむ竹槍を扱き扱きたらむに　東京江島雨煙

夜來あめかぜ伏せのいらかは鶏あけぬ

蔦よび交ふはいか舟よせのお嬢が感ン歿

防波しらじら脛のしとりも友よふて唄

伯耆富士てふ雲に雲よせ旅そぞろ

波條夕冴えぼんの盆唄監視船ある　東京本多多城

雪の中井戸あり井戸へゆくところ

蠶棚の前手拭をとりたる母のかたち

青嵐吹き下ろすところ巨石平ら

筍食ひ頃が過ぎ青嵐高いばかり

毛蟲這ふ土の乾きの赤い松葉牡丹　千葉淡路呼潮

みんな少しづつ神經を尖がらしてゐる早春朝の粥

沼田の白鷺首をのばし私も頸をのばし朝風

一日一椀と肚をきめ老僧笑つて若葉を見てゐる

一本一本草を挘つてゐる中に一日すんでしまつた　諏訪今井默天

やくざみ依さじいも飯も言げ暑さに

桔梗夏咲く雨すゞろ諏訪うき眞夏

簗はをりをり風向のさびしい夜鳥

さんざ土まみれ花南瓜汗の壹すぎ

案山子風貌いかさまも湖の落暉　東京川口三角洲

參宮電車

直線路稻田の青のきつい照り

旅をし偲ぶ峽が柳のこもらひ續く　五十鈴川畔神苑

御手洗の水の冷やにこだまする樹々

宮川堤

茂みに鳴くのいたづらに捕る汗

なにかして居れば一日一日延びてゆく豆の芽南瓜の芽　東京服部竹映

放たれたこゝろに新綠の朗るさがしみて來て

明るい新綠にも落ちつけぬ心空しく

新鮮な馬鈴薯豐かに戰ふ日本獨逸　廣島神崎跨昆

筍をいたゞき簞笥の抽出しを開けかけてゆくなど

住宅營團のどの家にも陽あたり思ひ〳〵の芽

馬を繋ぎて癒癒んでみることも考へられる樹のかげ

名古屋　衣浦眞

南瓜を夕餉園藥の畑から風
葉むら夕風は飄花遊ぶかに無灯の卓
悲報心臓を刺す雲湧けまくれ夏潮

奈良小野暮仙

疎開親子にきびしい殘暑水飲みに並び
むしむし宵な月見草家裏に雛も
赤い赤い月いづラッシュ刻すぎ電車の窓に

臺南本田茂光

妹故國にかへる

半生のいそしみを雲に殘してふるさとの柿の青葉に涙する心ぞ
業のめぐりなほさだまらずふつとその手を思ふ
ゆきかへる心のほつれその心灯失ふな今宵また旅情に祈る
亡き母の幻寒く頬つれのいたみをわけん去年の徑

西宮　奥田我木香

悼花臥衣子

たれもかれも雪空べ愁眉を向け
妻子揃ふて居て夏物多物揃ふてゐて配給不足ない
海にをのこをみなら澄測たのもし日本裸體季

濱松　久野仙雨

滅私日もなも一夜障子を入れ灯に坐す
土手暗き歸り路遠この潮鳴り九月空澄む
決戰の秋ぞもはつらつ金魚水替へむ

伊那　池上耳考

婦人竹槍訓練

月下その裂帛の氣合婦人襷鉢巻

戰死お新盆

盆燈籠涼やかな浴衣で去年は踊つてゐたに
玉砕ニユウス植付不能田もく〳〵豆を蒔く
炎天下工員素ッ裸エンジン銃聲に似る

伊那　伊藤柳江

畑々麥畑穂立ちタづくあかい空
とどかみなり暮れがつ駒ケ嶽は道のまむきに

大阪　吉田秋汀

慰問の小供がくれた水中花ウガヒユツプに開く
血潮干乾らびし俎板の鼈除香尚燻る
旅つかれの目にしみる故郷の青葉の朝々
今日こそは落つき得られた雨の若葉の窓
木蔭に床屋あり清水湧く眞晝

伊那　中山百姓

生産戰の怒りともけふはよ盆燈籠にあかりして
マーヴ今年もやつと田に穂見ゆからお盆唄

伊那　伊藤岳宗

遠雷颪す二百十日近か草縞だてて鳴び
夜ぐも雫隱青き月光柿落ちて屋根

伊那　中山巨子

たたかひ苛烈何くそ盆も田の草這ひまくれ

高岡　森抱葉

朝の配給が鮭の切身で晴れやかに戻り行く

七尾にて暴風雨にあふ

出水の鐘に枇杷のぬれ葉の重たく垂れ
出水ふえゆくヒマの青白い幹

出水を問ひ暗い電話室で蚊にくはれる　千葉　石野美沙緒

裏山椿がみんな赤く雨の二階に立ち　東京　吉川金次

白紙のやうな雲夏曉の湖渡る

防空服裝身につきて夏曉で起つ　岐阜原　丈鳳

植田かげのひる征くを送る旗のひらめきすぐる

夏の濱邊のわが影を濃きものにかたぶくまでの月　三條大橋鏡作

火花散らせつ熔解爐ばたの汗噴き出づる

どろろ鑄込む火花と砂塵とけむりこもらふ

鑄物場の熱氣のがれき蓮田風のひととき　大阪　英吉更

孫つれて潜む待避壕の蚊のうなる音

南瓜蔓延びつゝみのらず黄花と大葉

警報の敵機も來らず曉の鷄鳴く　名古屋　北原胡淑

闇夜眞赤な鐵打ちうつ影學徒

學手して學童ら疎開した蟬々庭木

祈ら大和一致征く爆音の滿南ぞら　ハルピン　鈴木長司

二月明るい空へ皇土黙々と凍原解く　大阪　岡田吐月峰

梅匂ふ日曜の朝を開け放つ部屋　東京　箕輪十三叟

上野の工藝展にぎはしく散る花に醉ふたことなど（掉藥川）

○　一碧樓選

草刈鎌が欲しい秋の日川べりでそれを磨ぎたい　東京　吉川金次

妻はふたうね三うね蕪の種をまく家裏の土を起す

南瓜を煮てお地藏さんに供へる朝飯の子供と親

秋のくもり空の雜木のなかにまじる兵士

秋の日の少女の額汗ばみ一臺小さな旋盤　尼崎　谷村靈三郎

牛の足を洗つてやれば夕となり雁來紅

炎天雲一片ちり黍畑穗の稔り

夜勤少年工が出て來た月明り醒かけて

疎開の子にどれも雁來紅が大きく吾が家

黍葉折れしまゝ殘暑の風廣く吹く　秋田　相澤華芳

菱沼どうにも菱がびつしり見えて過ぎる

渚からかなりはなれゐて立秋河の船

夏夕太古のごとし山に山のながるゝみづ

虎の尾のはなくさばな變りなき界隈

國攻勢の構へ黍の實りし畑の朝　東京　星野武夫

鷄舍の砂乾いて葡萄の房が青い

炎天今し田からあがりし人のぬれてゐるあしあと

父が深く掘返し土を篩ふ夏の日その土の乾かず

石工殘暑の日地めんに白い石の粉　京都　川島南海城

少年謙遜し陸稻の青い穗が立つ　諏訪　守矢自由也

鷄頭あかければ話す小母さんの戰意　陸稻とこのあたりの家がかぐはしき日ざし　越後　中村亂水

水べ殘暑のにほひありて胸の厚い男　新涼これの穗太いあをい粟のそこに虎杖がうごくなど鎌を研ぐに　秋田　三國屋白省

立秋山にぐるりをもつ山の寬快　すゞめの蟬の朝となりくる空　お盆きてふるさとまんなか立ちて火の見の櫓

殘暑一つの標準へ鍬をおろす　喇叭兵の夜になつた兵舍秋夜整然　越後　長谷川杉郎

隣りあふて隣はこどもばかり合歡がさき　まつすぐのみちゆくひと百日紅をすぐる　雷雲くづるゝに芋の葉青い　杜のなかに灯が見えたりする月夜の稻田

しつかりめしを食ふに朝の土間に鳴く蟲　東京　根岸榮一郎

この道つらなりゆく人らと立つ地熱　家前胡麻がみのり月がある夜の畑のものの

夏朝桑畑から背戸へ曳く牛が黑い體　裸體の翁獲物があり秋陽つよい夕の沼

雁來紅色づかぬ庭土乾き　葱畑葱ありて木の上の雲動くことなし故郷

起きて機械を信じ朝山を信じ家に棟あり　舟に渡あり父が釣り子が釣り舟底の艫

住みて萩が伸びた飯食ふお茶碗の感觸　國土の綠潮水の綠に起きて一村の朝山　越後　中村亂水

稻架を組んでをり萍びつしりの水邊　夏の日潮碎けては港灣荷役の女ら

猛暑の海を來しが船に小さなる備砲　船の男と露草咲くところにて話す

夕日のはざに稻架けてある濡れてある稻　備中　田邊愛水

野菊咲けば風吹けばおもふとほく軍馬のうごくを

敵近きにあり百日紅地に咲けり　防空壕を掘る葉鷄頭倒さずにおく

蝗捕へる朝の蝗わづかに冷たし　青い柿を食ふひろい地に立つ　秋田　杉村木々人

めくらぶだうの藪もけふ三人が見る山の空

すゝき穗すゝき原薇山丸い顏が光つて

今朝も落鮎の話萩は花をこぼし　朝靄流るゝ氣品山にこの家あり莨麻あり

一歩君の英靈あり一うねの紫菀透明　大阪　北川吸江

夏夜部屋にすゑものいくつもありお茶をいたゞく

行水のからだのまはり昏れる茄子畑
海に突き出て巖あり沖の夏潮うごく
ふるさとのお城見えてくるずつと青田の向ふ
夏ふかしいはほのうへをみづが流れる

京都　松宮磨研

撫子わづかに咲く動かず土用或日の磧
茄子を燒くそのやう家ありて住ひ
朝から簡單服を着盆過ぎの女の人
飯が焚けた無花果の木に暑い日
柿の木青い實が盆過ぎの藏の壁

岡山　笠原大能露

朝日さし本の夏芽や僕のからだや
人間日やけし日でりの栗の青い毬
女もじつと地にすわりはぜを釣る
舊盆月に道の白きにあゆみ
桐の夏木の影大ぜい出はいりす

東京　沼文生

西瓜畑にして西瓜をかろく叩く我れ
夜裏の戸に音あり青柿おちし
女子挺身隊員の出發町外れの山青葉が茂り
或は葉をむしりなどして道端の秋大豆
車にとまとなど殘り眠りし人の寢顔

秋田　西村薇山

日中家にゐて見ゆる朴の實の葉蔭に赤く
山百合實になつてゆれて山頂に行くみち
少年兵發つたあと家の韮の花

畠の胡麻みのりはたらいて弟夫婦
胡桃落ちし路上なるに水漬き

諏訪　山田不雪郎

草が厚ければこゝに水に鎌とぐ男
青々青萓がなびく皇土子らが一列
機影ありこれの諸の蔓もりあがる
太陽雲から出た桑の葉もぎつめる

東京　山崎多加士

芙蓉花咲く生涯工員としてのこゝろ
秋夕坂路いつぱいに下りて來る少女報國隊
墓參すませし道白くこの宵
戰友に逢ふ日の惡すごし紙に包み

京都　西山刀耕

いつものぺんぺん草みんな洗濯
歡送式日草にめざめし栗あをし
まんじゆさげ雲のほかにつぼみ
月見草咲く地圖を突く

○○隊　富岡のぼる

枝々ある木のマンゴーの實が太くて青い
僞裝船團征く黑潮が海がひろい夏の日
暑き日起重機で馬を下す船からなんぼでも下りて來る馬
敵機去れり儼然とこゝに夏朝の山

東京　吉澤稻市

河原の木槿株雨は家と畠に降る
日が往來を越えて來てはいる家の南瓜置いてある
池に青い草が浮き池のまはりの木の蟬

胡麻を干しはじめた道端の日襟首に暑い　濱松　口田朴也

野面一所の風芋の葉そだつ　小田原　堀川屈人

唐辛子の味と殘暑の麻衣の肌　濱松　永井はるを

雨に恃む畑ぐろ一本の向日葵　凌霄花咲きつのり牛がものを運ぶ炎天　秋田　足達短水

家門甫めてくぐる旱の干魚の一莚　草々殘暑のさまむかふ病棟へあるく　秋田　足達短水

暑き大地こゝに人參と牛蒡　親し寮の起居にみる朝顏の花白い花　札幌　近藤紫村

木の葉くろ味あり晩夏山のほそみち　鷄冠充分でない草が穗になる　必死增產に酷暑到る工廠一體に人動き　札幌　近藤紫村

夕雲重なり夏山動くが如く西空　草々が穗少年ら曳機のかまへ　蓬ぼくの背より高い吹き來る熱風　札幌　近藤紫村

かや野から風くるみちを行く早朝　齒車さま〳〵のむき殘暑工房と少年　軍靴きほひやがて雨と思ふ空の色　札幌　近藤紫村

野苺の實赤い原を見通しくだる　濱松　永井はるを　犬五六匹仔を產みとまと熟れる匂ひす　長野　新田實三

霧に濡れて來牧場の門しつかり締めて來る　凌霄花咲きつのり牛がものを運ぶ炎天　壹の月さやかに吹鳴試驗の透る空　長野　新田實三

野を霧の吹かるゝ方へ牛は顏を向けて　親し寮の起居にみる朝顏の花白い花　訣別の辭旺なる地にあぢさゐ咲きて　長野　新田實三

すゝき穗に立ち親仔の駒ひいて來る　必死增產に酷暑到る工廠一體に人動き　蔓草赤い花あり山だん〳〵暮れて行く　栃木　黑丸古生

尼崎　林　さあを　蓬ぼくの背より高い吹き來る熱風　八月花しろし學童疎開を迎へこの日　新潟　須貝　秀

雲うごく草のなかにて生りしとまと　軍靴きほひやがて雨と思ふ空の色　學徒一團くる日まはりの花朝露にぬれてるに　愛媛　菅　木葉

雀が鳴くくさに下されて赤きボイラー　犬五六匹仔を產みとまと熟れる包ひす　雲がもりあがつてくる暗くなる胡麻の花を見

軍裝ありがたし畠牛蒡葉のしげり　壹の月さやかに吹鳴試驗の透る空　防空壕のしづかさ子が手にせる螢

赤松の木のなか燈籠をもち來りし夫人　訣別の辭旺なる地にあぢさゐ咲きて　炎天除草機押してをり乏しき水が田に引かれ

新潟　須貝　秀　蔓草赤い花あり山だん〳〵暮れて行く　幾つも葉かげに熟れて見える椿の實

斜陽抱く西瓜がぬくい　八月花しろし學童疎開を迎へこの日　朝から曝書雜然とわが庭　西宮　高輪かつ子

蟬鳴く直ぐな木近く征く人とゐる　學徒一團くる日まはりの花朝露にぬれてるに

鯉釣に鯉釣れぬしげきつゆのしげり草　雲がもりあがつてくる暗くなる胡麻の花を見

父の寢姿秋風の硝子戸立てきつてある　防空壕のしづかさ子が手にせる螢

夏の太陽沒す山々の神國

窓より山が見え向日葵よほど小さくなりし花

川原草がのび水に足ひたす少女ら

あした地にかたき桃を拾ひ今日の日を祈り

京都　泉　大畊

桑は夏蠶にとりつくす眞晝雷す

黍の穗高し照りつゞくうれしく

夜は夜の業豆殻うづ高く盛りあげた蠶豆の殻

樹の間秋の日雛つれた親鷄

新潟　金子曙山

兵ら憩ふに道べ水引の咲きいで

炎天兵ら一むら楮の木のしげり

いま爽涼かうした世に大根菜の畝々

殘暑こゝの谷の木萱へくる蝶

岡山　山本光王

鹽濱に濱子が居り野人參のすがれ

日々木工場のうなりあかざ伸びきり

何か云ふておきたいすだれごしにをる母

おそい月がでた工場の窓々がある

秋田　渡邊碧山樓

草取つて畑を地を風ふき

稻穗啄んでくる日中男唇乾き

防空用水汲み充たし空にとんぼとぶこの日

大き山の一つを越えて見るまだ穗の青い田の旱

長野　半田雨衣

畑まはり濟みし盆の來る日

暮るゝ案山子に風あたらずにある

橋の下から水ある一方へかたむいた葦藪

いつしか小豆枯れそめしさまに朝の校庭

和泉　牧野秋風嶺

この頂岩が露出して木々のほぐれ芽

蘭たれ葉畏敬する人來ませり

峠を越え行かむ人々しら雲冷ゆる

蕭々霧はれ渡り山河あきらけく

名古屋　加々美絹子

大詔かしこみわたしたち櫻黃葉を踏みて

穗草にほふ地をはつきりふんで立つわが子

南瓜の蔓ひく父は多く言はず畑中

草の穗によろこびあり子とくらす一日

諏訪　宮坂岱風

蝗捕りにひとゝき蝗あてうごかず

尾根は霧流れ松山の小山日が射し

ゆふべ地のしめりに秋菜をおろし

鐵工場のひゞきあり紫蘇の實りし

東京　福田思川子

犬蓼大きく倒れ一めん日暮るゝ空

部隊一隊移動す栗實る栗林の方

郊外黍實りこの時バスを降りし姉人

秋空と思ふビルの曲つた階段を上る

紀伊　吉川葦川

蟬とつて來た蟬が鳴くこどものからだ

畑がひろく雀ちらばるそばの花がさく

ふみゆきおんばこの黒い穂とおもふ陽のなか
山までつづく諸島よき畝の夏　東京　木暮羽六

切つて梨をたべる僕に妻子あり
太陽がのぼる木に生りて胡桃の實
こゝに棲みしをのうぜんかづら太だ茂り
この時かなくが鳴き大きな機械とあ子と　横須賀　一ノ瀬碧水樓

人が去り人來りこれの巢のつばくらめ
夕べ切れ藻浮く海を泳ぐわが轟き手足
しつかり地に立つにうごいてゐる木の栗の實
なにとはなく鶏頭の花近く立ち一人の男　秋田　佐藤禾黄

干草から子どもの顔が二三出てはや去りし
旅ゆくけふの泊りは山下りて西日の部落
橋たかい殘暑の砂原あるくぐるりへ垣が家々の構へ烏瓜見える　長野　御所窪けさじ

乳色の霧木々にからまり峠過ぎ來し
日てり足もとからとぶばつた居て山路ゆく
人々青い實の柿の木の下にきて遺骨還るに
大豆がみのり女ははだしで畑の黒土　栃木　大川しげる

さゝげなど干してある家に疊りの山々
朝顔いつぱい咲いてゐる山近くに移り暮す
たうもろこし充分實り近くに青い山
茄子まだ〳〵生る雨ふりつゞきいくにち　〇〇隊　大澤蓬舎

棕樹枝もなにも吹き降りの窓ガラス
佛桑花赤く部落まひるの空氣
斜面草がみのりずつと遠くまでみのり
人糧馬糧のこと秋の日はたらくに黒い事務卓　秋田　相場汀石

晝顔の晝彫刻鑿屑落ちる
まぐさを刈る穂草に朝の月ある
白菜播いて二三日畠平つたい
夕顔の花とその外わが單衣のからだ　東京　後藤零丁子

寺に兄妹たちそろふ庭石にまとも夏の日
沓脱どつかりある夕べ黍の穂に風あり
紫蘇匂ふをたうべる兵を送る辭簡單
一ところ母が子供が種まくと秋の日　佛印　梶田羊介

屋上屋上をかさねて人うごく夏の日
雲に上下あり下水のそんなとどこほりに立つ
われ星を見まなこ蒼天にやるは孤高にあらず
フランボワイヤンの赤と綠そしてマチネをはる人々　新潟　佐藤豁山人

皆と祈る曉闇よ夏のそらなり
泥冠りし稻よいねの強さよ陽さし
逞しひまの葉のゆれ風北に廻り
君ら顔がはつきりする夏の雲に陽出でし

岡山　瀬尾一風子

甘藷ばたけが甘藷をさぐり掘りしたあとが
播く場所をするくらの壁にあたつたりする鍬の柄
青柿がべたべた落ちる背戸へはめつたに出ず
わたくしも栗を拾ひに出る入れる袋をもち

〇〇隊　大竹北汀

征くに雲々はやし春の潮の迅し
變りなき白雲にゆるゝ夏草の穗にいでし
城壁大方は崩れ棗の木の青き實をつけ
軍靴かるくゆく綿畑の花の赤いの白いの

岡山　松本西平

ひとつの瓜を食べる家族に夜北が出た
雨吹きつゝける庭前花咲く百日紅一本
日さし來て厄日すぎし雁來紅一叢
秋ばら咲けば夜々家の灯りすところ

山形　辻午子

夏菊は誰が贈りしや母につゞき合掌（父亡し）
父のすわりゐし黒き毛皮のよれ蠅を打つ（同）
霧はりつめし山にむかひ行く者の裝ひ
霧ふかし田人ら徑を進む光る鎌

公主嶺　永田禾陽

百花の丘拓く若人鶴嘴一せいにあげる
桔梗の一本ありて咲く軍道のうねり光りて
敢闘に汗ばむ隊員ら汗ばむ腕
君は行く葵紅く咲く部屋にて言葉少し

諏訪　藤森澤瀉

土のにほひ指さきからこぼれてゆく菜種
月の夜草山を見るひととすわりゐ
女さゝげをつむ朝から工場のひゞき
ほしてゐる蠶蛹のにほひ生大根をたべる

會津　渡部湘雨

僕ら眼の前に栗落ちて來て栗の木
先生冗談いふて實く芝枯れて
女はよく透る聲山に栗拾ふに
男なり兵なり朝顏みのつて垣根

東京　岡本五郎

しつかり地に立ちて退院す炎天眼に沁む電車の線路
體力日々つく味噌汁に浮く茗荷のかをり
柿の實赤く通信兵電線低くかけて行く
抜き捨つる防風の根白し海に向ひ遲飯を食ふ

兵庫　井口泥前

まつさを晴天この日かんぴようをむく
埴産炭燒人と夜徑を下るわたくし背ろから下りる
石ころ仔雀どちらがうごくんだ薄暮野の道
野菊ちら〳〵まだ角のない牛を放つ

越後　筑波波秀

木槿の花と白い食器と家のものらにひくい食卓
早稻みのるわれにまつすぐありて早のみち
胡麻の實おとすおばさんまともにて笑顏なる
少年牛車をつなぎ曼珠沙華を手折り

横濱　院瀬見立弓

粽の筵とりにゆく妹が子と土橋を渡り

わが子粽つくるをおぼえ妹が子と板の間

朝靄晴るゝ小川べの梅の木梅の實

夏朝小川にて顔洗ひその小川に添ふて歩み

藥師堂を描くあたり夏の松の木　大阪　淺野麗木

ながれる赤汐を見てをりし裸のこども

殘暑に來し濠の水も藻もうごくなし

炎天川がひろいそこに芥ながれあり

青田とほく灯りし一つの灯に向ひゆくみち

終點から家路につく人々にて夏夕の空　諏訪　武居泊雨川

老工員あり青い林檎をむいて

一帶草が青い穗人の聲遠くに

山が秋雲近ければ雲に對ふ

水ありいろ〳〵草があかるく露草が咲く

初秋みづうみうごかない戰身近く迫り　東京　今井六石

枝豆を鋏み妻が日の半ば費へし

鬪志男とし皆胸板を汗にし

その新盆の二英靈が浴衣をたゝむ一一

荷役勢ひ夕潮のいよゝたかまる秋涼

はやとまと末成りの一かたまりすてゝおかる　諏訪　山田蒲公英

蟲なくくらがり壕を知つてゐて家に入る

秋の日子供を壕に入れてみる壕に聲することも

粒々胡桃が生つてゐるいまいちど見る

蟲鳴く地に蟲生きてゐる石に

豫科練へゆく裸で飯を食つてゐる息子　秋田　木内柳陀

お盆くるふるさと馬のにほひ

すいつちよ壁にゐるよる皆さん

青田のにほひ夜から朝に涼しく

ごはんあたゝかい蚊遣よもぎ匂ふ

曇天だんだんとお祭のそら　大阪　大久保芦川

烈日山の池水に茶を沸かし樵夫らと

墓の南瓜風に堪へる暑き日暮るゝ

吾子の聲吾子の姿けさ爽かに庭木

ぬけどぬけど草々梅雨降らぬ暑さ

江尻芦青みたり海をゆく船　昭南　中田紅甫

花なすの色白けゆくばかり風吹くばかり

愉しきは白き皿のサラダに風とほり

小さき蛇が登る椰子の幹あからさまなるを

空より雨降り來る蒟蒻の双葉に

露の芝をふみ黒い服で振返り行かるゝ　札幌　西田望洋

波のぶつかる磯の岩鷗のこゑす岩のあひ

草の穗うごかず明る山の上より陽さし

雀落ちて來て何のひゞきなし秋の草むら

虎杖の花さかりすぎこんな日石投げて遊ぶ兵

わらんぢのひもしつかりとしめあたりひるがほのはな

新俳句論研考 (2)

西垣卍禪子

新俳句藝術の誕生——基礎論

究竟目的實現の方法——絶對的生命の把握

我々の生命的要求は永遠の生命、無限の擴大、絶對の自由を屬性とする統一的大生命の實現せざる限り滿足せざるもので、人生最後の歸趨もこの統一的大生命の實現にあることは前述せるところである。故に、人生の活動は意識的たると無意識的たるとを論ぜず、統一的生命の希求として躍進し開展しつゝあると云ふことが出來る。

ここに注意すべきは、この統一的生命は與へられた事實として、人類に先だつて存在してゐるものではなく、人類の活動に依つて創造的に實現せられる可能態であると見做すことである。然し、これは我々の生命の內部に活動しつゝ、我々を鼓舞し、推動してゐるかに思はしむるところの力を有する點では、絶對的なる生命と名づくるを至當とする。故に絶對的、無限的生命とも云ふことが出來るであらう。

この無限絶對的生命を自己自身の裡に實現すると云ふことは、價値の創造を生命の眞髓とする生命自らの欲求から生れるのであり、これぞ根源的なる生命自身の要求に外ならない。從つて、眞に絶對的生命(本質的價値)の希求であり、顯現であると云ひ得るのである。

この無限絶對的生命——これは決して宗教的生活の理想を以て、現實の生命的理想を律しようと云ふ假定的理論ではない。勿論宗教的理想もこの統一的生命の一方式ではあるが、國家の發展も、學問の發達も、藝術の理想もみな內的意義をたづぬればこの大生命卽ち統一的生命の希求を基礎としてゐるものであると云ひたいのである。

かくの如く、我々の藝術(俳句)制作の根元は生命的要求に立脚し、かく生命觀に迄還元されねばならない。これを自己單位として追求する時は、自己生命の要求を實現する爲の理想と現實との相剋に藝術的創造の意義を見出すのである。この見地からは、生命內省は俳句人として自我の主張であるとも云ひ得るし、自我主張に於ける個人性の躍きは、宗教上の信仰に於けるが如く、自己信頼を背景として確立するとも云ひ得るのである。そして、藝術が個性の表現であり、生命の流露である以上は、作家の人生觀が矢張り總ての基調をなすものであると云はねばならない。作家が眞面目な生活者であり、又、根強い藝術の憧憬者であるならば必ず各個の藝術論、それは世界觀がなくてはならぬ道理である。

故に、作家の藝術論は哲人、思想家と異なり、作家の人生觀からおのづから發展なせるものにして、一切は永遠に解脫して行く過程であり、そこにこそ人生の價値が存すると考へるものが我らの信條である。勿論かかる解脫主義は單なる消極的自我否定ではなく、否定に卽してより高き肯定を認むるところの解脫主義であつて、我らの制作に於ける俳句の本質(卽ち本質的價値)の究明も所詮はこの解脫主義を基點としてゐるのである。卽ち、究竟目的實現の方法、それは絶對的生命の把握であるが、この大生命の希求、方法としての解脫觀の種類は境地として種々異なるものであつて、それは解脫者の人格に依つて體驗上に於いて種類を異にするものである。然し、自主活動を中心として論ずれば、種々の解脫觀もこの生命觀の中に抱合し得るものである。ここに生活の希求がある。(註1)

かくて、生命は絶えざる過程であり、進化であり、創造である。藝術も、宗教も、學問もこの生命活動のうちに發展する。而して、こ

の生命活動は人間の生活を様々に規定する。故に人間生活のうちに實現される藝術も宗教も學問も總て人間生活のうちに特殊な形態を以て表現されるのである。別言すれば、我々が藝術や宗教や、學問を問題にするのは、それらが美醜、善惡、眞僞を問題とするのではなく、如何に人間生活の要求が藝術なり、宗教なり、學問なりに實現されてゐるかを問題とすれば足りるのである。故に、人間生活の要求は時には本能生活となり、遊戲衝動となり、或は强烈なる信念となり、高遠の理想ともなり、學徒の知識慾ともなり、哲人の思想活動ともなり、詩人の情熱、感激、憧憬ともなつて現れるのである。かくの如き生命力の顯現は利害の念、善惡の價値判斷を超越し、飛躍し、突進せしめんとするところの特徴がある。（註2）

かくして、藝術とは生命の眞の表現であり、生命の眞髓は創造であり、從つて、創造的藝術は生命の眞面目である。而して、藝術家はその獨自の眼をもつてその體驗を考察する。されば、個性表現とは自己の體驗せる思想世界の開示とも云ひ得るし、文學に於ける意味内容となる世界觀の根源である。

故に、眞理も善も美も生きんとする生命活動の要求——無限絶對的生命を實現せんとする要求であり、生命の欲求は藝術の基根であると云ひ得るのである。

かくの如き論理の下に、我々は美的價値（藝術價値）が一つの文化價値として有すべき妥當性及び自律性をこの生命活動の欲求に基礎づける。而して、この根源的美（本質的價値——純粹感情）を表現するところに我々の新俳句藝術は生まれるのである。（註3）

（註1）我々が俳句せんとする行爲の消極的部面は、解脫を求むる心にあり、これが國家との關係に於いては、各個人の利害關係以上に全體のために何らかの犧牲を要求し得る根據であり、國家の爲にその身を殺すといふことは、所詮、現實的生命がその究竟目的たる絶對的生命の進展のために犧牲になると云ふ意味である。小なる自己が自らを捨てて大自己に生きんとするやり方であり、生命自爾の法則上自然の義務を履行するといふことに外ならないのである。かくて、作句することが心を練り、心境を高める練行であるとなす倫理的無我說の根基がここにある。

（註2）俳句せんとする行爲の積極的部面は、無限を憧憬する心にあり、これぞ新俳句の理念であつて、この究竟目的たる無限生命は所謂詩性（ポエジイ）を意味する。然し、この詩性（根源的美）は與へられた固定した美として藝術行爲以前に存在するものではない。從つて、我々の作品が構成され實踐されるに依つて顯現するのである。我々の俳句する行爲は、固定せる一の美なるが故に俳句として制作するのではない。詩性の全人格的な直觀的體驗が尊い價値なのである。されば、俳句人の俳句性たる規範（世界）は、單なる思惟的認識にあるものではなく、眞の客觀的行動から發生し、この作句行動は單に知的に止まるものでなく、人間の理想とする自由と生命の豐富とが、現實として具體的に見出されるものである。單に主觀の範圍に於ける觀念的規範でなく、客觀を限定して生ずる事實の規範であるのである。よつて、我々の俳句性問題は、俳句と云ふある詩美概念を排除し、詩性の「無」内容論に立たなければならない。口で說く詩性の俳句でなく、行動による實踐の詩性でなくてはならない。

（註3）美即ち藝術美とは、普通理想主義に立つ見地からは、個性や個物の中に人生の普遍相又は永遠相がいきいきと描きだされることである。人生の普遍相又は永遠相とは、人生の運命、人生の實相、永遠的な人間愛或は憎しみとか、人間の悲劇的運命、不可思議な生活などすべて人生の永遠的な意味そのものに外ならない。觀照の方面から云へば個性又は個物の中に人生の普遍相を味はふと云ふことは、單なる理解ではなく、味はふの意味で、直觀又は想像といふ知的作用を要し、他面、翫味又は體驗といふ情緒的活動を包含するのである。謂はば全人格的感興で、單なる快、不快の感などと形容さるべきものではないのである。從つて、藝術價値とは、全人格的感興を促進する價値を單に情緒的に或は知的にのみ解するヒとは誤である。また藝術美とは人間にとつて先天的な要求であり、衝動でもあるから、先天的要求はすべての人に本具的なもので、この普遍相の創造又は翫味こそは、藝術美への根本的な普遍的な先天的要求即ち生得的な藝術衝動であるから、この藝術衝動が人間に具はる限り藝術は永久に人間によつて要せられ、この原理が普遍的先天的な原理である限り、藝術は他の文化價値と並んで獨自の本領を有するのである。

句評

和田光利、朝倉九鵜子、福島一思

家のなかも御遺骨いつ歸つてもよい梅の木の青梅　（折嶺）

【光利】是ぞ聖戰下に於ける日本の相であり、是でこそ日本は不敗である。家の中も屋内外の清掃された感じが解るし、英靈を迎へる遺族の心が靜かに落付いてゐる事がうなづかれる。何といふおつとりした迫らない氣品の漂つてゐる作品であらう。眞晝の軒あかりに結實してゐる青梅さへ慶ましく葉がくりに見えるではないか。

【九鵜子】家のなかも―を―梅の木の青梅―に照應させた技法はさすがと思へるが、「家のなかも」が一向に利いてゐない、梅の木の青梅もありふれた技巧におちたやうである。斯うした手法を用ひた場合、擊く句中に溶け入らして效果をあげるもよい。又相反撥させて詩情を高める表現はよりよいとおもふ。現實の事象事物を安易に措置することは眞の詩生みの道ではない。ここに据うべきただ一つの表現把握への突進を希む。

【一思】何か一句が冗漫である。御遺骨に青梅を感じる神經は凡ならずと思ふが、かう表現されると、どこで句切つて讀むのかそれも判然し難くなる。「家のなかも」と內外を言はうとした處に難があるのではなからうか。「家なか」とし「梅の木青梅」としたら如何。

豌豆の實入り潮の動く朝の海　（二一郎）

【光利】まことにすがすがしい新鮮な題材であるが、是だけではちと微溫的で物足りないかんじがする。芭蕉のすぐれた俳句の中では一木一草と云へども、只の草木ではなく芭蕉の內在した生活があつた。自然に活を吹き込んだ作品であつた。何がなしもつと打ち込んだものがほしい。リズムの上では豌豆の實入りのあたりが、ぎごちないし、結句の朝の海に題詠的なくさみを感じます。

【九鵜子】餘りにも目から手と言ふ作である。一詩としての內容をあきたらなくおもふ。

この對境に對する作者の詩感情のうごき其のものが形ある表現となつてこそ、卽詩であると僕は信じてゐる。顯微鏡的の觀察が光彩を放つとすれば、詩の龍骨がしつかり据つての上のことだとおもふ。

【一思】「潮の動く朝の海」は如何にも清新、溌剌としてゐる。それが豌豆の實入りから悟入してゐることも自然である。たゞ語法として「實入り」が少し硬いと思ふ。けれ共「實の入り」では平板になるし昌りは原句の方がある。この處尙相共に考究すべき餘地があると思ふ。

出で立つ日の吾も手をかざしぬ　（竹嶂）

【光利】出で立つ日が作者であるか、近親同胞であるか、明瞭で無い。他にしても自分にしても、あまりに出征にしては感動がなさすぎる。かざしぬも颯爽たる萬歲にしてはあいまい過ぎる。德川時代の歌學者は「歌はことはるものにあらず、調ぶるものなり」と述べてゐるが、全體が說明に墮してゐて、かたちばかりで、この題材から溢れてくる生命感といふものがすこしも感じられない。

【九鵜子】ただにばくぜんたる表現も成功すれば面白いとおもふ。作者は出征者と聞く。

いざ前線へ。故國を遠く去りゆく日の心懷を詠つた一作であらう。この句の邊然では一向にひびいて來ない詩興を遁してしまつてゐる。とは言へほのかに香氣が感じられはするも、一トりきみ表現苦を盡し

て欲しかつた。

【一思】何か事柄が凡そ分るといふ程度で情が迫らぬ、肝腎な何かが落ちてゐるのではなからうか。この何かゞ大切なのである。この句では骨組だけしか感じられぬ。そこを埋める壁が欲しい。

せみなきしきる子の顔ちかく青葉ぎつしり　（絹子）

【光利】私はこの作品に接して、ゆくりなく稲田豐四郎の描ける六月の森といふ繪畫の構想を思つて嬉しくなつた。童子の無心な顔は何に見恍れてゐるのか聽き恍れてゐるのか、青葉のぎつしり繁つてゐるその饗の童子の顔は實に靜かだが、今にも叫び出しさうな生命が溢れてゐる。自然の中にひたつた人間の生活——私は此の樣な精一杯な自由な伸々した、しかも重たい肢しい作品を愛します。

【九鵜子】今一トいき、出るものが出て來ない、青葉ぎつしり、がイージーである。御婦人の作に對して、おもひやりのない評言ではあるが、戰局いよ〳〵苛烈を極めてゐる現時下、八面玲瓏的な評言などふりまきたくないので。

【一思】この作者としては珍しく「青葉ぎつしり」と放膽な表現をしてゐる。それが成功してゐるかどうか、僕は案外應へない。何か全部言ひ盡したといふ感じを與へる。他の發表四句の方に共感をもつ。

ずつと胸にあるサイパン島のこと旅にても思ふ　（正方）

【光利】戰爭を詠つた作品にはなかなか佳品が無い。四肢を張つて勇ましいけれどもほんとうの力が籠つてゐない意識に捉らへた句が多い。此の句も然り。どうもあまり露出だし——もつと內に沈潛してからゆつくりと歌ひ上げてほしい。すなほさが無く觀念的であるし、結句の「旅にても思ふ」はすこしく安易な行きかたである。

【九鵜子】僕の詩規尺が間延びしてゐるのか、評句提出を誤せられて、陸、陸風集中これはとおもへる作品を見出し得なかつた。それならそのことを書けばいいと言はれて拾ひ出した句であるが、この句——旅にてもおもふ——で理づめになつてしまつた。上章をうけて詩になるもならぬも、下のこの一ト切れの工夫如何にあるとおもふ。表現苦いまだしの感である。

【一思】一句の惑には心から索かされた。「旅にても思ふ」が甚だいゝ。措字にも粉飾なく、さつぱりしてゐる處、作者の人柄も偲ばれる。たゞ「胸にある」が語句として平俗であると思つた。こゝをも少し迫めて貰へないだらうか。

月が明るいコップの咲く花になる　（重三）

【光利】なかなかしつかりした內に沈潛した深い作品である。月が明るいは月を仰いだかんじではない。月のあかるさを魂にぢかに感じた氣持であり、コップの咲く花になるは、月光に這ひ寄られたコップの花が、充分に水を吸つて咲くべき力に張りきつてゐる象である。是は正しく作者のひたぶるな凛とした生きかたである。作者の信念に滿ち滿ちた肚の坐つた人生態度のあらはれであらう。

【九鵜子】輕快なリズムを採るべきであらうか。一句にもられた詩感には何らの新味が無い。更には內容淡々として煙のごとく泡のごとくで詩心をうつてくるものがない。或る時代はこれでよかつたかも知れないが、詩對象の選擇を僕は強調したい。言ふなら、月が明るいが安價である、ここが力の入れどころではなかつたか。

【一思】何か未來派の繪を思はせるやうな句で讀んでゐて、甚だ心愉しい。層雲が歩んでゐる道もかういふ處にあるやう思へてこの道なれば相共に語りたいと思ふ。まさに花開く詩である。

各家近什

木の山の椚に星の出揃ふてまたたく　秋田　大越吾亦紅

ひぐらしと板木と、部落のをとこをんなこども

検札浪の日本海に添うてゆく車内　兵庫　山田宗作

背なの子と話して行く母の秋の夕ぐれ

乳のへに稲穂がふれる家に子を置く

ひろい・野を日のいろ朝の秋茄子　大阪　長屋青橙

こみち溝のみちおほかたくさのはな

曼珠沙華水澄む小溝に近く

匂ふ手のもろ手ほしくさゆふべ

曉天動員霧ながら山土を踏むも

秋宵入が夜業をつゞけるうしろに鐵兜かゝれり　但馬　井手逸郎

朝に雁來紅咲く地濕れて増産の工場

窓へ遮燈暮し秋ふかまる夜々室の壁

秋夜敵機の構造圖みる子とからだを寄せる

戸によせて火叩きあるところ秋の夜眠る

ひえが穗に出て雲こども疎開してきてゐる　出征　赤星竹峰

早稲田の稲のうれそめて山すそにある道

うちにゐて川に橋がかかり見えてゐて秋

蠶どころの葉桑のしげりの中にして家がまへ

初秋蠶のころ峽といふのでもなく山そびゆる

海へけふきりのハモニカ贈つてやらう

故郷を北に蚊を退治て了ふ　鶴岡　和田光利

闘ふ日が來た木の實をとつて食ふ

大地を踏みしめるもう俺が土をふみしめる

萬歳を叫んでやつた昨日の事だつた

ひるつきかまきりほんにしづかな　名古屋　加々美青河

廁にも月さすあゝらうみ

厚い葉月をさへぎりすずしい

けんのうヒマたくましある日は龍なす雨

嶽には雪のほのかなり獨活の花

艸に栖む艸の明りの窗をもち家々

あ子と一日をくらす艸の葉ひかるなどを殘暑

雲うごく無花果が青い畠夜明けし

紫蘇の稔れば今日われに在る餘力

徑つゞく艸々暑さ殘り　岩手　加賀谷灰人

兵を遣りて戻り書齋あかるく灯してゐる

朝光りみち日の丸立てゝからの遠い山の嶺

英靈町についてゐるけさとぶ鳥の深い空

銀河眞うへにゆふべ沼の家

木木に風やむと夜明けてゐる　東京　九貫十中花

蓮田が暗くて少しにほひ空を警戒する

鯖おほく獲れた地引網渚の砂かたい

夏ひるこれを十本ほどぬく根淺い著莪

いちじくを食ふ今夜月が雲にかくれて

けふうすい太陽の下南瓜の蔓ひいてしまふ

○○　平賀星光

窓の硝子に寫る顔の淋し訃にゆく吾（叔父の死）

喪に居て鄉土の飯を嚙みあたゝかく

八重櫻に蜂の來て居り泪する

お骨がさついてこれが肉親の叔父さま

歸り汽車に乘るふるさとの苗よ更に伸びよ

名古屋　池原魚眠洞

梅雨がふりだしてふつてゐる石、石の上の葉

トマトひとつひとつもぐひとつひとつうれてゐ

バスの停る航空本部前ポストがあると木があると蟬

藪ぬけて青田の中通る道がひざかり燒場の前通る

夕立のあらつていつた月夜の月である筧である

京都　井上充夫

朝々が夏がゆく隣の佛飯あげるりん

朝がもう暑くよんべ猪のついた畑のいものつる

馬車が來てゐる供材の松山松の幹松の幹青空

背に青い柴にして人夏山を下る池に映り

木を伐る中の伐つた木の一本橋の、流も秋

信濃　小林滿巨斗

一めん空のくもり來る雲に雲の峰くづれ

玉葉大きな球になり山にて傾けるはたけ

夏山の山毛欅が伐りたふさるゝこだま

龍膽の花すこしを手に笹山をくだり

食糧ともしきに堪へるすゞしきとまと

東京　上原晃雨草

土手からの夕燒空は增產の煙あるばかり

あらしともならず晝月の立秋へ出勤する

闇は想像のはてしなく戰場へちちろ

でもこれでよいのだそれが私だ映畫にたゝずむ

少年は敵を尻目に故國へ泳ぎつづけて居る今もゐる

兵庫　蓬萊鶯郎

浮巢の池の夕やけて水の渦巻く樋口

兵に子らに泳ぐ川ありて綴流

吹き拔ける風あり燕の子は座敷へ下りる

土用の浪頭白し蛸船の歸る港外

殉國の秋きたる夏袴短くつける（村長就任）

東京　福島一思

ものの結實柿の木實がありて朝の雲

鷄を二三羽を地に放てば夏朝家の口

もろこし畑に風ふくことあり繋がれて牛が大きい腹

萩の白花夕べは少女が髪たらし家に歸りぬ

福岡　加藤迷々可

鑛石曳く馬もほつと夕雲からの涼風

田が山へずつと青くて英靈お迎への人だち

防火水どれも夏雲うつし良い色の子だち

夕茜に蜘蛛が網張る產業戰士歸る

朝は驛に隣りて蓮はれはれと征くが送られ

大阪　中原我樂

一群一群夏草原に突つ立ち兵隊

山がしらみ野がしらみ青田のみづ

池に水すましをり池をなんべんもまはる　越後　小林銀汀

黍の穗を包むをばさんのうしろにこども　越後　小林銀汀

朝霧濃くて白蓮のはな山へ道がある　六合　山木

おぼんで餅つく音三日月が山の畠に　六合　山木

雨が重さうにふつてくるかぼちやのつる　浦和　山木六合

雨の青田のすげ笠をちこち見ゆる雨あし　浦和　山木六合

構内もかぼちやの花の雨が洪水になりさう　浦和　山木六合

この地はろか敵機墜つ水槽の金魚悠々たり　弘前　柳田流矢

髪のよごれも戰ふ國の乙女とて勞務に出てゐる　弘前　柳田流矢

子ども莞爾として疎開す小さき荷を下げ　弘前　柳田流矢

疎開跡の松の木鳥とまるでもなく秋に入る　弘前　柳田流矢

毒消賣り人居ればこそ賣り歩く公園の樹の蔭　弘前　柳田流矢

征く日まではせつせとはたらく西日そばの花　秋田　淺利小鍵

お天氣のことなどいふて征く人もうゆく時刻　秋田　淺利小鍵

お寺が學校朝から讀んでゐる秩さいてゐる　秋田　淺利小鍵

鯉が背を出す日和の早稻なら刈りころ　秋田　淺利小鍵

麥まきすんでこんや巡囘映畫けふ好い日和　秋田　淺利小鍵

人らかへりゆきたりしみちの蘭草　鎌倉　井出台水

母の新盆の盆前と思ふ草を引く　鎌倉　井出台水

虹をうつこのやう貌かたち父に似る　鎌倉　井出台水

凡俗苗代の畔わたりてゆく炎天　鎌倉　井出台水

暑さ遙のいてゆく草々の位置　鎌倉　井出台水

パラオ葉書は壯者凌ぐ慨よごれてを　長崎　松尾敦之

明けきらぬ念ひは遠く二十日朝粥を　長崎　松尾敦之

雨上り小鳥鳴き來る向日葵たゆたふ　長崎　松尾敦之

向日葵實るは小鳥啄むトマトかぞべつ　長崎　松尾敦之

庭を畑ならあたら棕櫚剝ぐ見晴れてに　長崎　松尾敦之

ことしも駐在所のまへのぬかるみが櫻時　茨城　渡部嫁ヶ君

汽車のつくたび人がとほり土手の櫻が蕾　茨城　渡部嫁ヶ君

うぐひすつつましくくらしてゐるミシン一だい　茨城　渡部嫁ヶ君

灘が昏れてからの微かな光が爐の實　茨城　渡部嫁ヶ君

もろこし穗なしたうきびの枯れたるとたち夕日　東京　安藤比冠星

山の尾萱原に雲切れて日ざし落ち來り　東京　安藤比冠星

吾にすゝむうで豆畦豆引いて來し嵩の　東京　安藤比冠星

はけごの底の山栗の嵩子供達一群　東京　安藤比冠星

わだつみの神草薙の神それ〳〵吾兒秋空二兒出陣）　東京　安藤比冠星

うらみわだつみ手し手しにやまとをみなはも（サイパン島）　福岡　木村緑平

さやぎ雲いろみたまがけりか雹をさへ　福岡　木村緑平

すがし遠蟬を裏裏おぞまし子おらび女　福岡　木村緑平

かぼそり言はじも暑中水涙あはれはれ　福岡　木村緑平

破傷風癒てし口悦びのあぎと西瓜盆　福岡　木村緑平

ふくろうときどき雲から月が出て水音　海に入る日が丘の上麥刈る生徒先生　この二階樓の花今晩月夜です　生徒達麥刈つてゐたり水兵さん散歩してゐたり海から風ふく

蟬がなくと蟬をきく君と僕と猫　秋田　池田亜杜子

家鴨萍を食みうす日のやうな

いちにちときながれ池の萍　京都　前田多川

こゝに壕にほひし夏夜明けし

青田あをき夕方あり村民裸馬に乗り

ホームに捕虜の一隊後ろのビール工場夏めく　東京　宮林釜村

言葉もなくて君のやせたひざの上のうちわ

森があり村があり月が明るくて汽車が走る

妻と二人切りの朝の粥と漬け茄子のいろ

山々の雪屋根の雪橋の雪渡る

女長いもんぺを穿いて秋立つ　東京　中島せい作

立秋地下足袋がわが足に合ふ土

花藜の露に打たれ行く人

棉の花咲きさかり照りふる郷

槐老木花少し散らし風音

へちまの影も月夜の青い祭りがきこえる　越後　武田露明

海の月夜になつて寄せる浪がこの家裏ぐち

どこかに祭りのある月夜が間借をして親と子

寺をひぐらしあづけた子をつれて出るひぐらし

お習字は行儀よく萩の花畫を散り敷く（訪疎開児童）

松の丘ぶだうの丘日中人往くなし

われにこの一日あり盆すぎ能登路の山

もろこしをかみこの子上方のそかいの子ども　秋田　池田亜杜子

藤の實松に生り奥能登海うつくしく

わが子兵なり眼にしむ汗をまばたき

西吹く波の斜め老へる夕曇り　新潟　稲垣一鳴

綺麗とおもふ猫のゐ涼しともおもふ（悼柚子樓君）

蛇のゆくゆけやとおもふ畫皿小鉢（愛猫の死三）

髪刈りし日こころいよよいたみて

けふ十日濱畫顔の實飄々

鴨足草井戸が日に日にふかくなる　大阪　木戸夢郎

みいくさいよいよ酣にして田に水を見廻り

父の墓は吾家のまへ雨の日は雨が降つてゐる

山が暮れ川が暮れ暮れて來た我家に戻る

言靈の幸はふみ國と朝々の祝詞のけさの秋

或る時風にゆらぐ庭の女郎花の莖　東京　加藤羽双

谷川に水に脚をひたすところ大石

海滿月人うごく町の家々

庭に萬兩の實がついて耳遠い父と

幹も枝も暗い木犀が咲いてはゐる

月夜の雨が灯がうすく小降りとなつた空にある山　諏訪　原蝦煎子

風が出て來てはれさうな雨の中木槿落ちてる

麥刈つて歸つてゐるはだか月さしてゐる

穗の出た麥も丘わたり月のてる湖の白さに

なすびの花召され征く日を祝ふ物持ちて寄り

すゝきの溝をさかのぼり溝つきたすゝき　東京　細木原青起

秋の日の色この枝も截る松を透かし

わが作りし南瓜いま切らんとす庖刀

書幅碧とあり字があふれてゐる秋彼岸

野菊のみちまろきをまがり笑つて行くに　東京　米倉勇美

きびしい世の妻の疎開に賛意す銀河澄み切り

すつかり掃除も濟まし家開けて愈々疎開します

日蔭日盛り貸間探しに疲れ果てた疎開やもめ

田のしじま學童報國隊去り夕の葭切

蝶とぶ朝のトマトの眞つ紅な實のり　香川　井上一二

うぐひす山の池の事務所の時計が朝

雲の白くうどんの白く山の湯を出てゐる

魂棚吾子に早年のひでり茄子はそなへ

「心の燭の芯を剪れ」と師の言葉、桔梗を生ける

海邊管制の送り火はたかない今夜魂を送る　近江　若林乙吉

のうぜんかづらあか〳〵街に咲く壕を掘り

石段を上りてしばし遲櫻手に近し

部落夜はみんな灯を消し山の包ひ若葉の包ひ

國土の海朝は朝は鯵の豊漁

山あり山ありてその下麥野が見える　下關　近木黎々火

水に音がある田におちる

月が出た土の中へ待避をいふ（敵機來襲す）

空襲解除蝶があさとまつてゐる

大きい建物の裏が雨、ぬれてゐる　京都　財馬呵歩

わたしひとりが死に殘つて糸瓜がぶらり

暑さも今日ばうちの裏でなく蟬

蚊帳つるほどでもない蚊が初七日はやすぎて

秋の暮れにうごいてゐるのが手拭かけの手拭

みんないんでしまうて佛の百合の匂ふ夜る　福岡　飯尾青城子

螢に風、浮橙臺が暗い海に

阻塞氣球も月ののぼるにつれ警戒とけない

朝早い驛前交番机に花を白服の巡査さん

墓地のうしろ青い海炎天の少し波たち

龍膽の花よきほどに降つて霽れた巖のしづく　東京　南晴星

うねりある海に入りたし何も見えてゐない青い海

簡素な建物に講義し屋外うれて來る無花果の畑

桃畑もいで貰つた白い桃を手に持ち

大雨うつ芝生一隅に咲いて百日紅あかく

三人出征桑の樹大きく茂り住む父　東京　木下笑風

出陣の弾に遇ひに來て

遠く遇ひに來た百日紅晴れ渡る空

陽やけた太い腕米英を撃つと云ふ空へ瞳

練習機またとぶずつと稻田青い風吹く

九月山の色どり練習機雲に轉回

峠越え來る朗らかに擧手する螢草咲き

句輯

喜谷六花

民草こゝも栖む山峡畠ありて粟の穗
突如葛の葉風起り山の男
敵機必ず來る木槿咲く吾家一方ひらけ
丘にむら穗のすゝき低い雲と高い雲と
銀河さやか君に再びの御召ありて夜々
女郎花吾亦紅高原へ出た吾が顏
南瓜とげえとるとそんな一處に置くものがありますか

秋山秋紅蓼

すがた秋めく不二となるみいくさ迫る
末枯早くかげりくる木々をはなれる雲
秋茄子の一つ二つはあり妻も老いしと思ふ
國土いましみじみと鳴く蟲にも月照り
石一つ二つ庭の蟲鳴いてゐるか
蟲のゆふべのかにかくにわがまへ箸置く
夕日ひとところ秋茄子と白い猫

林雀背

すつかり畑となつた庭の雨の庭のながめ
蟲の音ようとほる菜園雨ふつて晴れて
豆の飯たべ子と掃除する防壕も少し掘らか
たうきび初めてなつたたうきび子とかぢる夜の爆音
南瓜をならべあの日あの朝を繰返へす顏陽に灼け

古林巴水樓

朝顏から菊も作りこんなに諸が隣組へくばらう
いくらでも水出てくるまだ蚊もゐる決戰この秋
耳へ手を當てて聞いて笑つて征つた顏が見えるやうな
このごろ朝は歩くことにして秋は木かげのある道
潮がさすとかくれる岩のかくれると暮れてくる
犬がついてきて氷に陽があたつてきて日曜
警報さへざへと鳴りわたりたれば芋の葉の露
戸ざしてはないが留守の日向葵陰つた許り
疎開して行つて秋の日ぐれの海苔粗朶が舟の中

原鈴華

皆働へこゝろ一つシャベルもつものの汗
み民皆働ひたすら樹には樹の蜩
ラジオ體操朝の胸はる子の肋骨がゆたか
親と子と地の祈り地に桔梗の花
夾竹桃しるき赤そのしるきを机二夜三夜

細谷不句

南の方に島ありありて麥蟬鳴くいちんち
あさ〳〵家のまはり蜘蛛の圍大きくもゐる
豫後きびしくいふ人たち秋の日河がながれ
林檎を三つくれる妹がめがしら
下草みな濡れてる蔓草すこしうごく雨中
兒供ら土手の草刈つてかへる芦の中の露草
胡桃が木に生つてるをそれをいふ男口元の皺

朝倉九鵞子

ものかは嚴隣組の意氣山どよもしつ（防空壕）
しぐれしぐれつ無言君還る青田村口（石川兵曹葬）
鐵路に徑雨後の草蔭曾良が句碑（平泉四句）
おもはざりこや光堂奥州の眞夏陽
べんけいなんと小づくりな墓碑したしも
指呼柵趾いかにか武者ぶりむかし九年役

安齋櫻磈子

國戰ふに秋に山の家にある遠景
水引の花あざやかに少年仔山羊を愛す
橡の實拾ひ持つこゝろはつきりお墓に詣る
武神八幡宮賑ひの中に咲く芙蓉の花
この日護るこゞしく生るなつめの空を

疎開の學童を迎へて、二

晝ともなれば童らにひかる尾花の山
涙して見る嬉々といたゞいてゐる枝豆

渡邊砂吐流

ばんざいばんざいホームが盡きてしまひばんざい鷄頭眞赤
梅雨晴れの店の奥の椅子で對談してゐる

長州へ旅す五句

白い鷄が生み落した白い卵で風がもう秋
夜をこめて音は製氷所が月夜の青田の中に黑く
戰ふ貨車に擦れ違ひ擦れ違ひ海の蒼稻田の青
青い落葉も雨の電車待つ列が疎開で廣うなつてゐる
このへんに珍らしい俥屋さん空ら車で黍畑の白い雲

松宮寒骨

二階を吹きぬけて行く風靈食ふ葉音
月見草に立つ我裸身を打つ風
渚遠く來し我等に合歡は花さく讃中
風秋めく朝この時巨艦進水す
棉の花咲いてゐる裏山のぼり行く少年
山裾ながく引いて暑い木の間湖があり
工場のひゞき芦原みち秋の汐

內島北琅

どこもかも食ふ物の花咲く雨ふる
我が子のとしごろ疎開學童の顏秋の雨見てゐる
そばの花さかりけふも亦旗に字をかく
まだ青い栗の毬雨晴れし子をつれて

訪北信濃白夢居

暗い音は甌馬のにほひとめてもらふ
馬を甌に大きいかぼちや抱いて來た
昔外人部落沖に軍艦も居るやうで秋

奥村四紘人

秋播濟ました顏の晴れやかに征つて來ますと
押し來る黑雲垂れさがる水兵さんあせらず通る
急なひと雨浴びた街路樹の影ひとも影して
雷雨ひがしからはがれ蜻蛉すいすいの街をいそぐ
戰線から便り無いともろこしたわわにゆれ
遠山の夕燒負うて木戶直す蟲の音にかがみ
古釘腰弱なもある木戶の內外蟲鳴き

栗少しを買ひわがこの日犬山へ來て　妹尾美雄

磧が石ばかり下呂が初秋

山を山を幾つかもすぎこゝも飛騨の山鮎の粱見る

家に杉郎あり火鉢あり青い唐辛子

北國の海近き驛にして梨が木に生り

敵機來るとおもふそれとは別に胡瓜を抜きすつ

立ちて別離の情夏終る日に　內田南艸

疎開の跡が遠くひらけ秋は自ら來る

秋も朝なら赤ん坊も秋をおぼえる

雀が太つて土に來て韮の花咲く

秋暖々乎大いなる門の芭蕉破るゝ

人も木も戰ふあらはに月下の伐木

秋の日ほしいまゝ供木の大きな切口

つくつくほうし鳴き澄む供出の日近き伐木　伊東俊二

讃岐小豆島にての作七句

けふ征く人に舟おいて島のまはりの海の青く

鷄頭がこぼした種が雨がふる

むしろ三枚ひるの日あづきいろのあづき

くさのなかの食べられる草いつぷくする

黒いトンネルがある電線は暑い山越えてゆく

大きな牛が橋を渡つて道がいそがしい町になる

空が青く草が青く盲が洗濯の音をさせる　荻原井泉水

一にぎりは胡麻がとれさうなうちの胡麻の花かな

ごまのはなを降りはしない雲がかげらしては通り

むかしどこかの濱の灯のやうな南京豆の花日暮れまへ

秋、赤いレインコートのしづく子は學んで歸る

雨に蟬が鳴き出しても霽れるでもない雨が秋

來るといふ葉書萩の花地圖かいて出しにゆく

幼く獨り人の歸らぬ道遠くまで見てゐる秋　中塚一碧樓

決戰野菊花さきしうごくなし

草花のなか朝飯を焚きをはりたり

朝霧に出でてずつとつゞいてゐる道

夕陽暑し畑に南瓜に與する

月夜訪ね來し直ぐに歸るにつゞき生垣

空やはらかにて畠の紫蘇の實り

あをあを人參畑を充分に見た秋の句席へまゐる　西垣卍禪子

寫經婦夫（フタリ）の夜々燈に寄る蟲に耐へ

千住川岸の煙り秋雨の家を鉢朝顏

女子挺身隊

驛の燈暗きをうぶい姿あのひとかたまりの少女

こころしてみるその姿り學徒の日の丸驛の中の幾人

ついに防人三人を征たせむ朝を行手秋空

寺にいつとはなし皆が出て麥刈終はんぬ

息子近くを征くに南瓜畑に南瓜おき殘す母

編輯後記

○敵の戰意なか〳〵熾烈である。この決戰は局部的戰鬪の決戰ではなく、皇國の興廢を決する一大決戰であることはいふ迄もない。本誌も本號を以て五號を數へるが、我らの總蹶起體制と俳句國民運動はどうなつたか、俳句日本の集團は總力をあげてその力を發揮しなければならない。我らの力は新俳句壇總力といふ意味に於いて長期に亙つて發揮し得る性格は期待し得るが、先づ當面の諸問題をかたづけて近々その總力を形に現さうと思ひます。諸氏の御協力を今から願つておく。

○本誌の使命は種々の面に於いてあるであらう。本誌は單に結社雜誌の性格に止まらず、つまり、個の集による全體の意味でなく、眞に公機としての新俳句人總力具現の實證を持たねばならない。從つて、必ずしも新人育成の部面に重點を置くことが許されない。この事は日本出版會の意見でもあつて、昔のやうに頭數を單に喜ぶといふ事情は時局が許さないのである。だから編輯に就いても隨筆ものの重視は採り得ないのである。論文、評句にあつては、我等の態度は俳壇の歴史を劃するにあることを知つてほしい。地盤と人數に就いて多少の矛盾は横たはるであらう。が兎に角、彈丸の紙と人の和といふことを考慮して、消極的ではあるが今後いよいよ理想を實現して行きたい。

○次號から多少の積極面を見せて左の原稿を募集する。

「俳句のコンマ及び空白の是否」

――からいふ意味の課題で募集したい。この問題は一ト頃論議されたやうであつたが、當時の結論は今日の結論とはならぬこともあるであらう。又、編輯子の見るところ、俳句日本が各社の統合であるが爲にこの當面の問題研究こそ新俳句の方途を指示すると信ずるのである。

○俳壇の動靜を報ずるために廣い意味の消息欄を設置する。これは紙幅の都合で毎月掲載は出來ないかも知れないが、一般の投稿を歡迎する。

（卍禪子）

杉山田庭氏、西宮市川添町十一、九月二十四日逝去

謹而哀悼申上げます

投稿略規

俳句日本作品

荻原井泉水選のものは世田谷區松原町一ノ八三伊東方へ

中塚一碧樓選のものは世田谷區上馬町三ノ一〇五〇中塚一碧樓へ

西垣卍禪子選のものは足立區伊興町狹間八八七西垣卍禪子へ

○句數十五句以内、楷書にて淸記、居所氏名を詳記のこと。

○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一月一稿一選者に限る事。

一、締切　毎月十五日

一、購讀誌代の拂込は從前通り舊各誌の發行所宛に願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本」社へ送金せられたし。

戰線及入營の諸氏の投稿に限り軍事郵便はがきにて差支なし

本誌定價

一册分　金七十錢（送料二錢）

六册分　金四圓二十錢（送料一册二錢）

十二册分　金八圓四十錢（同）

・前金（なるべく振替）で御拂込下さい。

・必ず何月號よりと御指定の事

・御轉居の際は發送部宛御報下さい。

第一卷　第五號

昭和十九年十月廿五日印刷納本

昭和十九年十月三十日發行

發行人　中塚直三

編輯人　西垣隆滿

印刷人　檜山公一

東京都小石川區諏訪町五六

印刷所　株式會社　常磐印刷所　東京二二六

東京都世田谷區松原町一ノ八三

發行所　俳句日本社

振替東京一七六〇六四番

日本出版會會員番號一一五〇〇四

配給元　日本出版配給株式會社　東京都神田區淡路町二ノ九

定價金七十錢

杉山田庭氏追悼

ひとりゆく奏野に曼珠沙華は過ぎてある　喜谷六花

涅槃君の死地はくろぐろと窓に見ゆ　内田南艸

葡萄を絞るかかる時うろこ雲いつたいの動き　安齋櫻磈子

悲報の受話機ひやびやと掛け雨音に眼をとぢる　奥村四紘人

柿だんだんに落ちいくつかみのり太い木　細谷不句

二月堂で會つたあの聲句に句に現はる　林雀背

彼岸花たそがるる松林みち下りて行くに　松宮寒骨

かの七ヶ日月夜か露よぶ松はおもかげと　朝倉九鷺子

雨を來る人に萩赤くて咲く草に　原鈴華

向日葵が實になつて立つてゐる雨降る　妹尾美雄

夕の手紙誰れ彼れのを居間に坐れば鵙が鳴く　西垣卍禪子

冷ゆる座のここに大きはねの羽箒　中塚一碧樓

俳句日本　第一卷　第五號

（明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可　昭和十九年十月三十日（毎月一回卅日）發行）

昭和十九年十月二十五日印刷納本